貝塚市埋蔵文化財調査報告　第37集

東遺跡発掘調査概要Ⅰ

1996.3.29

貝塚市教育委員会

東遺跡発掘調査概要 I

1996. 3. 29

貝塚市教育委員会

はじめに

東遺跡は、今回の市営住宅建替計画に伴う確認調査によって新たに発見した遺跡であります。

今回、調査のメスが入り、本遺跡の歴史を明らかにする機械に恵まれ、また、本調査概要報告書として刊行するはこびとなりましたことは、過去の人々の暮らしを明らかにすることにおいて有意義なことと考えます。

本書刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護、保存、研究の一助とならば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、関係者各位には多大なご理解、ご協力をいただき、末筆ではありますがここに深く感謝の意を表します。

平成8年3月29日

貝塚市教育委員会
教育長　福　井　昱　彦

例　　言

1．本書は、貝塚市役所建設部建築住宅課の依頼により、大阪府貝塚市東７番地地内に所在する東遺跡において実施した、市営東住宅建設に伴う事前発掘調査の概要報告である。

2．発掘調査は、遺構確認調査を平成５年６月10、11日にかけて、本格的発掘調査を平成６年10月11日から12月26日にかけて実施した。なお、内業調査については平成７年６月30日に終了した。

3．調査にあたっては、貝塚市役所建設部建築住宅課より多大な理解と協力を得た。記して感謝の意を表す。

4．発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課学芸員前川浩一、三浦　基が担当した。

　現地・内業調査および本書作成にかかる諸作業については下記の諸氏の参加を得て実施した。

足立凉子　稲田広美　尾越功一　大西隆子　　木戸えり子　下中理絵子

清水久子　中辻澄子　西野京子　橋本さおり　藤井記代美　堀内計秀

山本一吉　南　明美　米子千智

5．本書の編集は三浦が行い、執筆は第１章は前川が担当し、それ以外は三浦が担当した。

6．遺物写真撮影は、米子が行った。

7．出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会において保管している。

目　　次

はじめに

例　　言

目　　次（本文目次、図版目次、挿図目次）

第　1　章　調査に至る経過 …… 1

第　2　章　位置と環境 …… 3

第　3　章　調査成果 …… 5

1．調査の概要 …… 5

2．基本層序 …… 5

3．検出遺構 …… 6

4．出土遺物 …… 21

第　4　章　まとめ …… 42

図 版 目 次

図版１　検出遺構　第１区
　１．第１区　第２遺構面全景
　２．同　上

図版２　検出遺構　第１区
　１．第１区　第１遺構面全景
　２．同　上

図版３　検出遺構　第２区
　１．第２区　第２遺構面全景
　２．第２区　第２遺構面南部

図版４　検出遺構　第２区
　１．第２区　第１遺構面全景
　２．同　上

図版５　検出遺構　第３区
　１．第３区　第２遺構面南東部
　２．第３区　第２遺構面東部

図版６　検出遺構　第３区
　１．第３区　第２遺構面中央部
　２．第３区　第２遺構面西北部

図版７　検出遺構　第３区
　１．第３区　第２遺構面　SX－408、SX－409
　２．同　上

図版８　検出遺構　第３区
　１．第３区　第１遺構面南東部
　２．第３区　第１遺構面東部

図版９　検出遺構　第３区
　１．第３区　第１遺構面中央部
　２．第３区　第１遺構面西北部

図版10　検出遺構　第３区
　１．第３区　第１遺構面　SK－204
　２．同　上

図版11　出土遺物
　SX－401、SX－412(56)、SX209(110、113) 出土土器

図版12　出土遺物
　SX－413(77)、SK－204(123、137)、SD－201(128)、SX－208(131)
　SK－102(164) 出土土器

図版13　出土遺物
　SK－101(159)、SK－102(148)、SK－103(154、158)、SK－106(183)
　出土土器

図版14　出土遺物
　カクラン２(198)、第２区カクラン、機械掘削（232、234、236）
　第３区カクラン機械掘削（239、259）出土土器

図版15　出土遺物
　第３区カクラン機械掘削出土遺物

図版16　出土遺物
　硯、SX－401(280)、第３区カクラン機械掘削（278、279）

挿　図　目　次

図１　貝塚市遺跡分布図

図２　調査地位置図

図３　調査地地区割図

図４　第１区・第２区土層図

図５　第３区土層図

図６　第１区　第２遺構面遺構配置図

図７　第１区　第１遺構面遺構配置図

図８　第２区　第２遺構面遺構配置図

図９　第２区　第１遺構面遺構配置図

図10　第３区　第２遺構面遺構配置図

図11　第３区　第１遺構面遺構配置図

図12　SX－401 出土土器

図13　SX－401 出土遺物

図14　SX－405 出土土器

図15　SX－406(45～47)、SX－412(48、51、52、56)、SX－413(50)、SX－416(53)、SX－418(55)、SX－420(63)、SX－428(60、61、64)、SX432(49)、SX－433(57～59、62、65～67)、SX－456(54) 出土土器

図16　SX－406(68、78)、SX－408(85)、SX－410(72)、SX－412(69、70)、SX－413(71、77)、SX－414(76)、SX－418(75)、SX－420(80、81)、SX－424(79)、SX－428(86)、SX－433(74)、SX－448(82、83)、SX－451(73、84) 出土遺物

図17　SX－301 出土土器

図18　SK－202(106)、SK－203(111)、SK－204(109、112、114)、SK－207(105、107)、SX－202(117)、SX－208(118)、SX－209(104、110、113、115、116) 出土土器

図19　SX－201(119)、SK－202(121、130)、SK－203(126、135、139)、SK－204(122、123、137)、SK－207(134)、SD－201(120、127、128、138)、SX－202(129、140)、SX－203(141)、SX－208(131、132)、SX－209(124、125)、SX－211(133) 出土遺物

図20　SK－101(145、157、159、163)、SK－102(144、148～151、153、156、161、164、166)、SK－103(142、143、146、147、152、154、155、158、160、161、165、167) 出土土器

図21　SK－104(176、178、179、195)、SK－106(169、170、181、183、186)、SK－108(171、173、174、187、190～194、196)、SK－109(168、172、175、177、180、182、184、185、188、189、197) 出土土器

図22　カクラン2(198、202、203、205～207)、カクラン3(199)、カクラン4(200、201、204) 出土土器

図23　包含層第3層

図24　包含層第2層

図25　第2区　カクラン機械掘削(230～237)、第3区　カクラン機械掘削(238～253) 出土土器

図26　第3区　カクラン掘削　出土土器

図27　第3区　カクラン掘削　出土遺物

第1章　調査に至る経過

大阪府貝塚市東７番地地内に所在する市営東住宅の敷地内において、住宅建替計画が平成６・７年度事業としてもちあがり、貝塚市役所建設住宅課より埋蔵文化財の取扱いについて協議の申し入れがあった。

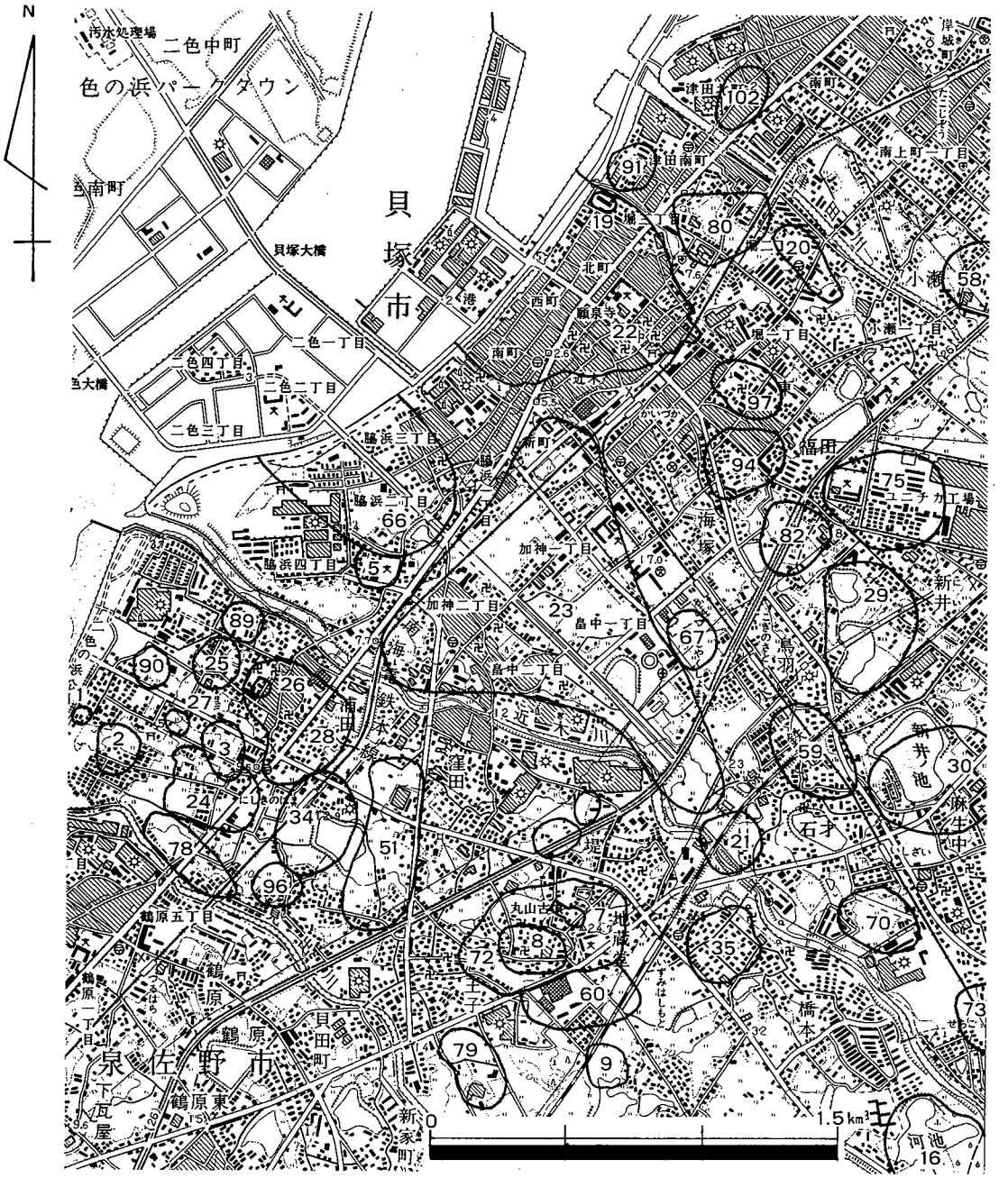
建設予定地は周知の遺跡外であったが、周辺には貝塚寺内町遺跡、加冶・神前・畠中遺跡、堀遺跡等が近接して存在しており、また、地形的にみても埋蔵文化財が包蔵されていることが充分に考えられる地域であった。

そこで、建築住宅課と貝塚市教育委員会との間で協議を重ねた結果、遺構確認調査を実施したうえで、遺構等の存在が明らかとなった場合は本格的発掘調査を実施することの合意をみた。

遺構確認調査は開発計画にもとづき２ヶ所の調査区を設定し、平成５年６月10、11日にかけて実施した。既設建物の存在する中での確認調査であり、充分な調査区とは言えない状況ではあったが、２ヶ所の調査区共に近世とかんがえられる包含層が良好に存在することを確認した。

この結果をもとに、建築住宅課に遺跡発見通知書の提出を求め、再度遺跡の取扱いについて協議を重ねた結果、建設工事によって破壊を受ける部分約1175㎡について事前に本格的発掘調査を実施することの合意をみた。

発掘調査は、既設建物の解体を待って、平成６年10月11日より、同年12月26日までの約２ヶ月をかけて実施した。



1.沢新出遺跡 2.沢海岸遺跡 3.沢遺跡 5.長楽寺跡 7.丸山古墳 8.地蔵堂遺跡 9.下新出遺跡 16.河池遺跡 19.泉州麻生塩壺出土地 20.堀遺跡 21.橋本遺跡 22.貝塚寺内町遺跡 23.加治・神前・畠中遺跡 24.明楽寺跡 25.沢共同墓地遺跡 26.沢西出遺跡 27.沢海岸北遺跡 28.沢城跡 29.新井・鳥羽遺跡 30.新井ノ池遺跡 34.澱池遺跡 35.積善寺城跡 51.窪田遺跡・窪田廃寺 57.堤遺跡 58.小瀬五所山遺跡 59.石才遺跡 60.王子遺跡 66.脇浜遺跡 67.今池遺跡 70.石才南遺跡 72.地蔵堂遺跡 73.名越西遺跡 75.新井・鳥羽北遺跡 78.沢西遺跡 79.王子西遺跡 80.津田遺跡 88.堤三宅遺跡 89.沢新開遺跡 90.沢タナジリ遺跡 91.堀新遺跡 94.堀秋毛遺跡 96.沢老ノ塚遺跡 97.東遺跡 102.津田北遺跡

図1　貝塚市遺跡分布図（部分）

第2章　位置と環境

調査を実施したのは貝塚市北西部に位置する東遺跡である。

東遺跡は、貝塚市の北部を流れる津田川左岸の段丘部に位置し、東西約220m、南北約220mの範囲に広がる中世から近世にかけての生産遺跡である。遺跡の範囲は市営東住宅を中心としており範囲内を小河川である北境川が南東―北西方向に流れており地形は川方向に傾斜している。海抜11～12mを測る地域である。

周辺の遺跡としては、北に古墳時代から室町時代にかけての集落跡である堀遺跡、中世から近世にかけての集落跡、窯跡である津田遺跡、平安時代から近世にかけての集落跡である小瀬御所山遺跡、東に中世から近世にかけての集落跡である新井・鳥羽北遺跡、中世の集落跡である福田遺跡、南に中世の集落跡である堀秋毛遺跡、弥生時代から室町時代にかけての集落跡である加治・神前・畠中遺跡、西に中世から近世にかけて繁栄した貝塚寺内町遺跡などが存在する。

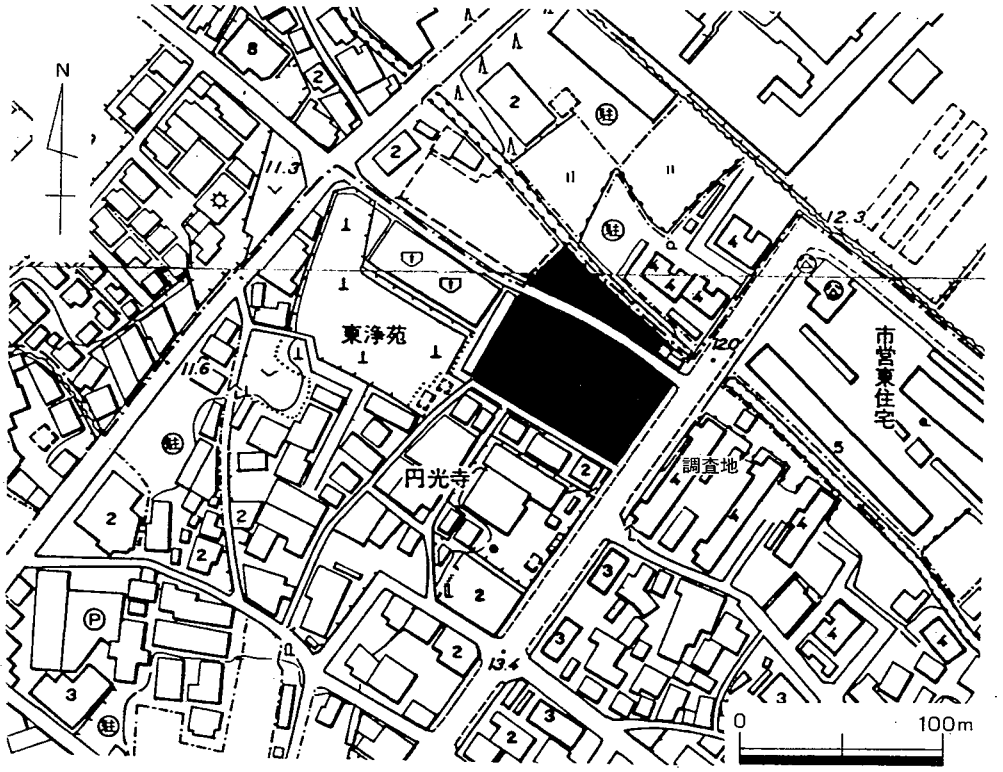


図2　調査地位置図

本調査地は、比較的大規模な開発もなく遺跡の確認調査もほとんど行われていない遺跡の空白地であったが、市営住宅建て替えに伴って遺跡の存在が確認された。遺跡は貝塚市東７番地地内に位置する。北境川に近接しているが市営住宅建設以前から住宅や耕作地として利用されていた。北境川はため池を水源とする小河川で現在はそのほとんどが両岸をコンクリートで固められており、本調査地周辺では水量も少ない状況である。下流に行くに従って生活排水等で水量が増し川幅も広がる。北境川は貝塚寺内町遺跡の北側の境界の堀としての役割をした川でありその名前の由来もこう言った所から付けられたものと考えられる。

周辺のまちの状況に目を向けると本調査地から約30ｍ南西方向に円光寺がある。円光寺は天文年間（1532年～1554年）に禅宗の寺として開かれた寺である。後に現在の浄土真宗に改宗している。寛文13年（1673年）寺号を許可され宝林山と号し、元禄６年（1693年）七高祖、上宮太子の画像が下附され、このころに寺の景観が整ったものと考えられる。毎年８月13日～15日の３日間は東盆踊り（府指定文化財）が行われる。

本調査地は大きく粘土採掘が行われており寺域とは考えにくいが円光寺ができた当時から少なからず関係の深い地域と考えられる。円光寺は昭和20年７月９日の空襲によって焼失しており、本調査地周辺も少なからず被害を受けている。空襲当時の航空写真によると本調査地は長屋の建つ住宅部分と水田及び畑として利用されていた部分の２種類に分けられる。

第3章　調　査　成　果

1．調査の概要

市営住宅建て替え計画に基づいて道路を挟んで北側の北境川までに敷地に２ヶ所、東側を第１区約40㎡、西側を第２区約70㎡、道路南側部分の建物建設によって破壊される部分を第３区1,065㎡として合計1,175㎡の面積の本格的調査を実施していった。

調査区は国家座標に基づいて５ｍ×５ｍの区画を用い、東西に13区画を設けＡ～Ｍ、南北に15区画を設け１～15とした。

調査では第３区の北西部において大きな攪乱部分が存在したものの、その他の部分については良好な状態で遺構を検出した。

2．基本層序（図４、図５）

調査区の現地表面はＴ．Ｐ．11～12ｍを測る。

現状地盤は、第１区、第２区については0.8～1.2ｍの攪乱土による整地盛土が行われ道路面に近い高さの状態であった。また、第３区についてはもともと北境川方向に向かって地盤が傾斜していたことと攪乱及び建物解体後に整地しているため、0.1ｍから１ｍ以上の攪乱土による盛土が行われていた。盛土下の状況は、各地区ごとに少しずつちがいを見せている。

第１区は、層厚約10㎝の耕作土である暗青灰色土、層厚約５㎝の床土と考えられる灰オリーブ色土の下は暗褐色土の地山である。

第２区は、層厚約15㎝の耕作土である暗灰色土、層厚約10㎝の灰黄褐色土（床土）の下は地山の緑灰色土である。

第３区は、調査区はおおむね層厚約20㎝の耕作土（第２層）が存在し、その下の部分は粘土採掘による埋め戻し土が複雑な切り合い関係を持ちつつ層（第３層）をなしている。地山は粘土採掘によりかなり掘削されており実際地山面より深く凸凹も激しいがおおむね灰白色粘土である。

また、調査区東南部には一段高くなっている部分があり、状況が若干ちがっている。耕作土下に攪乱部分が多く存在しており攪乱層下はよく締まった攪乱黄色土層が確認できる状況である。

3．検出遺構

調査では2面の遺構面を検出している。

第3区の南東部が一段高くなっており層上部については若干状況がちがうため耕作土下

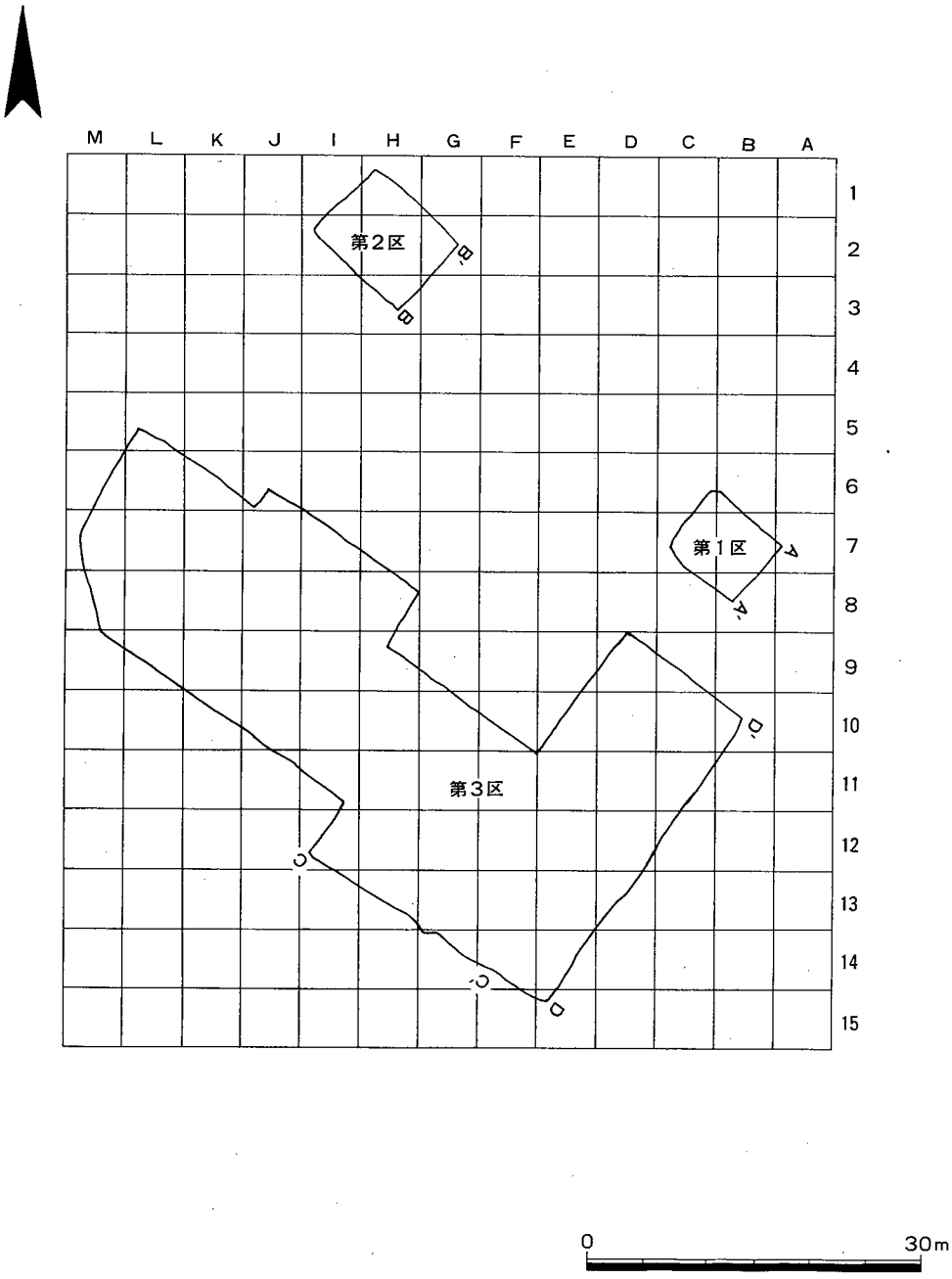
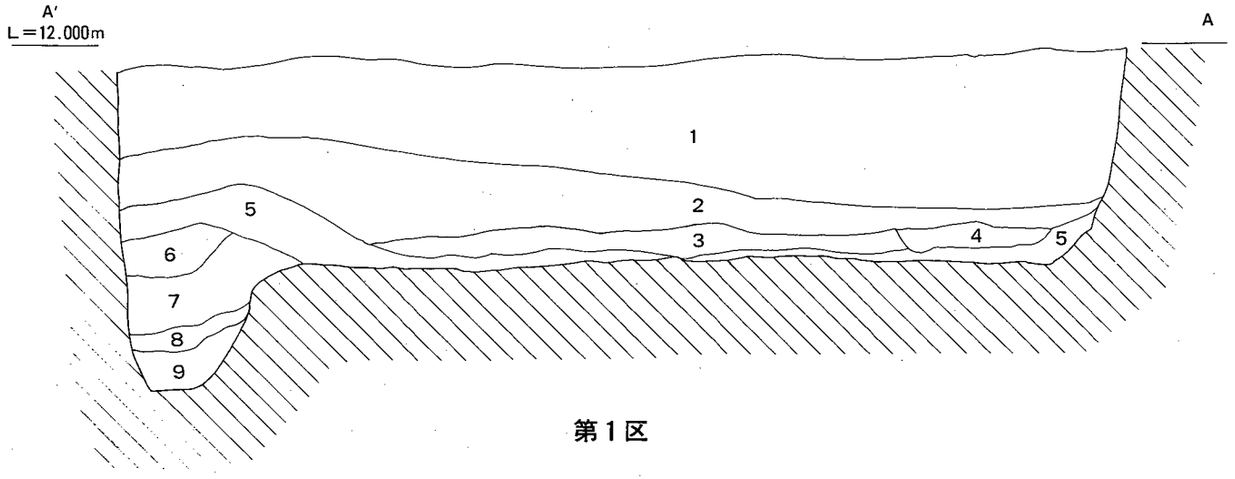
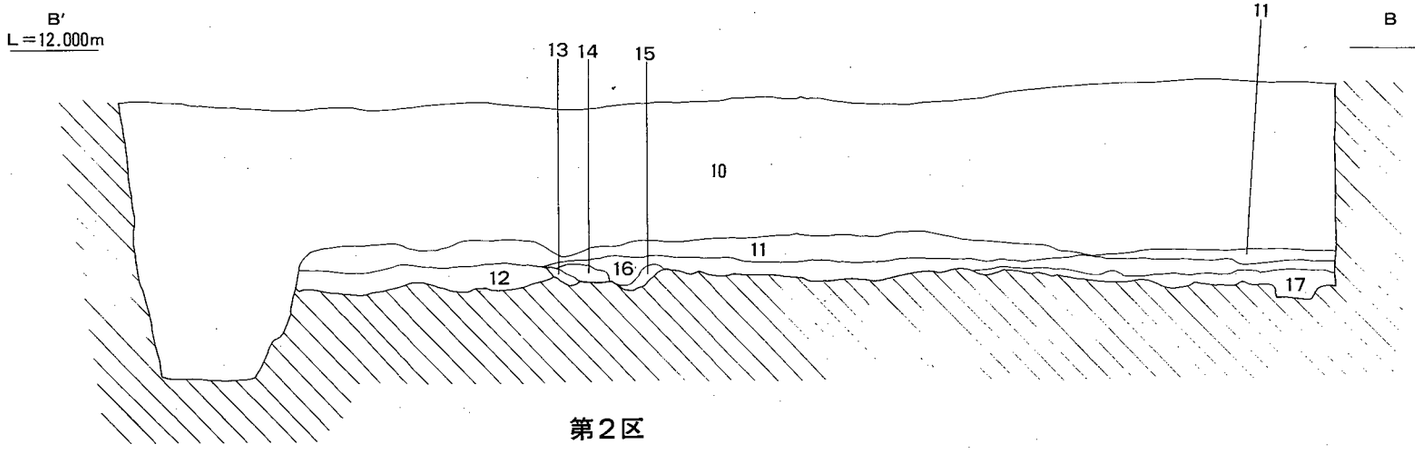


図3　調査地地区割図



第１区

1．盛　土
2．盛　土
3．耕作土
4．耕作土
5．灰オリーブ色土
6．灰オリーブ色土（耕作土混じり）
7．灰黄色レキ
8．灰白色粘土
9．緑黒色土

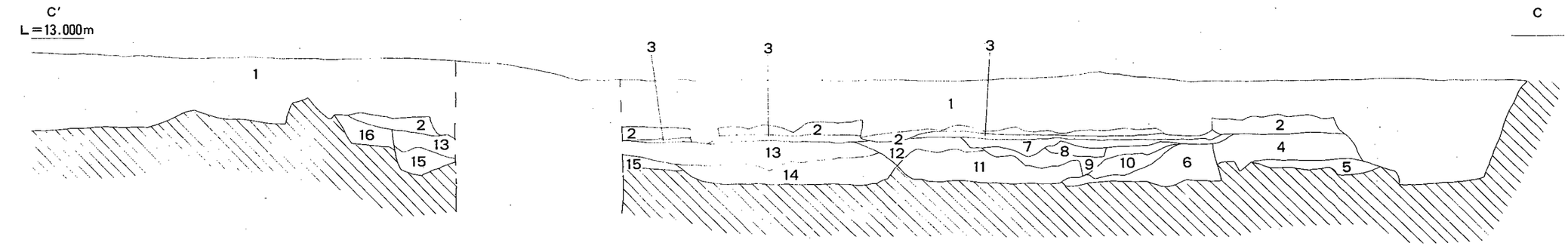


第２区

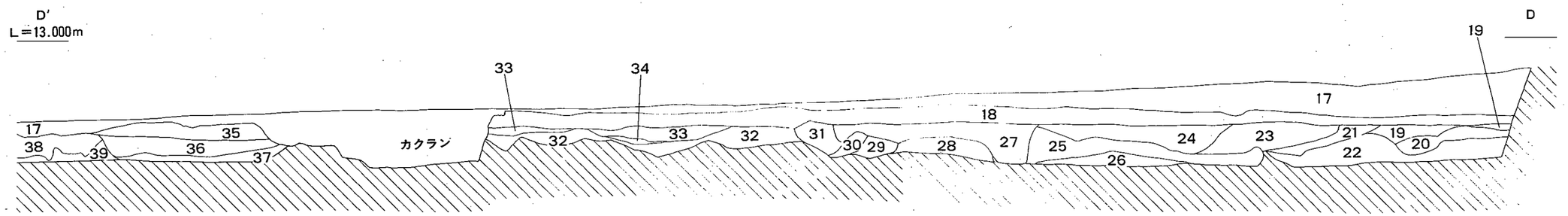
10．盛　土
11．耕作土
12．灰黄褐色土
13．淡黄褐色土
14．灰オリーブ色土（緑灰色土混じり）
15．灰オリーブ色土（緑灰色土混じり）
16．灰オリーブ色土
17．灰オリーブ色土（緑灰色土混じり）

0　4m

図４　第１区・第２区 土層図



1．盛　土
2．耕作土
3．淡灰色土
4．淡灰色土（淡黄色粘土ブロック混じり）
5．淡灰色土（淡黄色細砂混じり）
6．暗灰色土（灰白色、淡黄色粘土ブロック混じり）
7．灰オリーブ色土（灰白色、淡黄色粘土ブロック混じり）
8．灰オリーブ色土（青灰色粘土混じり）
9．青灰色粘土
10．暗灰黄色土
11．青灰色粘土（耕作土、灰白色、淡黄色粘土ブロック混じり）
12．灰色土
13．暗灰色粘土
14．暗灰白色粘土
15．暗灰色粘土
16．灰白色粘土



17．盛　土
18．耕作土
19．明黄褐色土
20．黄灰色土
21．黄灰色土
22．灰白色土（明黄褐色粘土混じり）
23．灰白色粘土
24．明黄褐色粘土
25．黄灰色土（明黄褐色粘土混じり）
26．黄灰色土（明黄褐色粘土混じり）
27．黄灰色土（明黄褐色粘土混じり）
28．黄灰色土（明黄褐色粘土混じり）
29．黄灰色土
30．灰白色土
31．黄灰色土（灰白色土混じり）
32．黒褐色粘土
33．黄灰色土
34．灰白色粘土
35．淡褐灰色土（黄褐色土ブロック）
36．暗褐灰色土（黄褐色土ブロック混じり）
37．灰白色土
38．明黄褐色土（黄灰色土混じり）
39．明黄褐色土（灰白色土混じり）
40．淡黄色土
41．淡黄色粘土
42．黄灰色土
43．淡黄色土（灰白色土混じり）
44．淡黄色土
45．淡黄色土（黄灰色土混じり）
46．淡黄色土（灰白色土混じり）
47．淡黄色土
48．明黄褐色土
49．淡黄色土（灰白色土混じり）
50．灰白色粘土
51．にぶい黄色土
52．黄褐色土
53．黄灰色土
54．灰色土
55．灰オリーブ色土
56．灰色土
57．灰色土

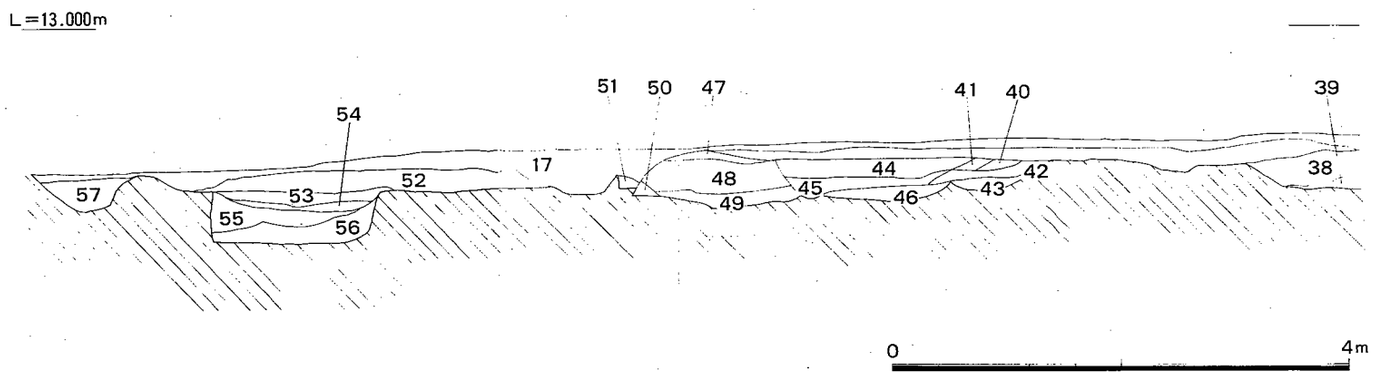


図5　第3区 土層図

の攪乱黄色土層上面において検出した遺構については100番代の遺構ナンバーを与えることとし、段下部分の耕作土下の遺構については200番代の遺構ナンバーを与えることで区別した。

段上部については100番代の遺構下からの検出遺構については300番代の遺構ナンバーを与えた。

また、地山上面において検出した遺構については段の上下にかかわらず400番代の遺構ナンバーを与えた。

第１区、第２区については第３区の状況に沿うように第３区に準じて遺構ナンバーを与えており、耕作土下面検出の遺構には200番代、地山上面検出の遺構については400番代として統一した。

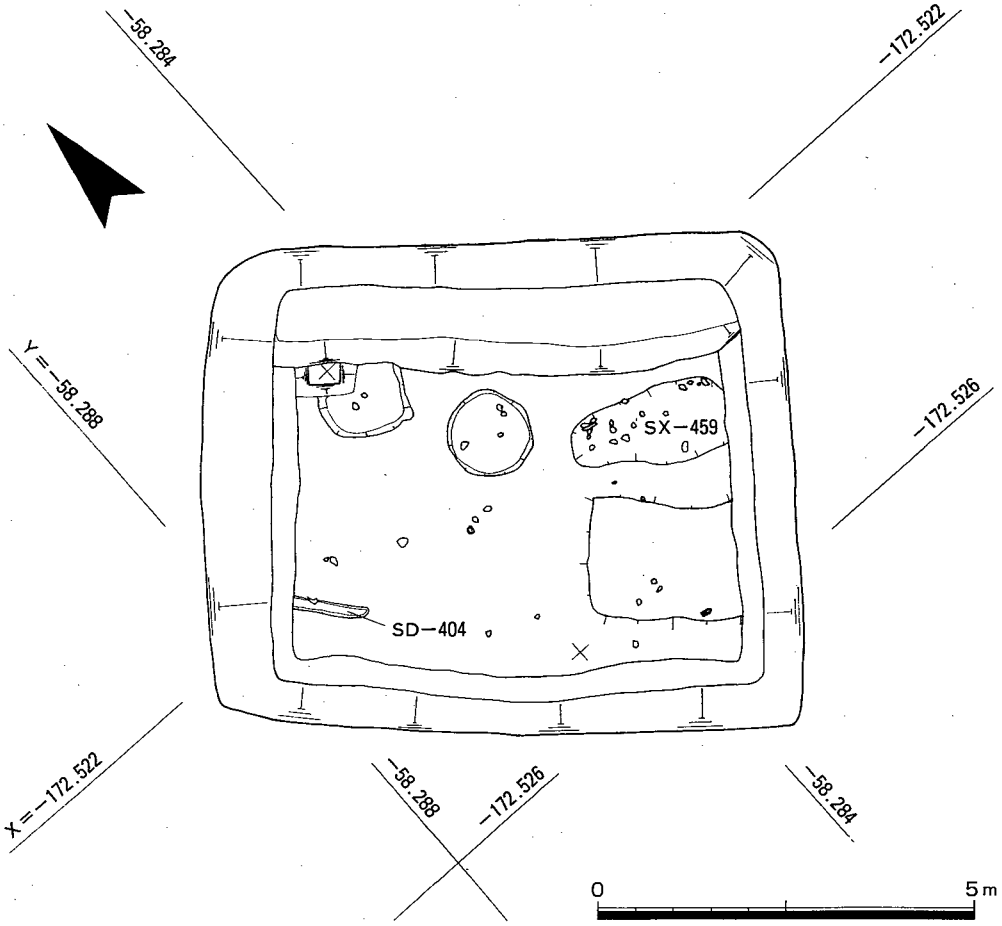


図６　第１区 第２遺構面 遺構配置図

第１区

第２遺構面（図６、図版１）

検出遺構は、便所用の埋め桶と思われるものを２ヶ所で検出した。ともに直径1.1ｍを測り底部と思われる板を確認している。埋め桶の間隔は約50㎝で長屋二戸一タイプのものと考えられる。出土遺物は陶磁器及び瓦片が出土しているがおおむね明治以降と考えられる。

第１遺構面（図７、図版２）

検出遺構は鋤溝、北境川方面の落ち込み、北境川改修以前の川岸を検出した。鋤溝は幅15～20㎝を測り、耕作土を埋土としている。鋤溝の方向及び出土遺物から本遺構面は比較的新しい時期のものと考えられる。

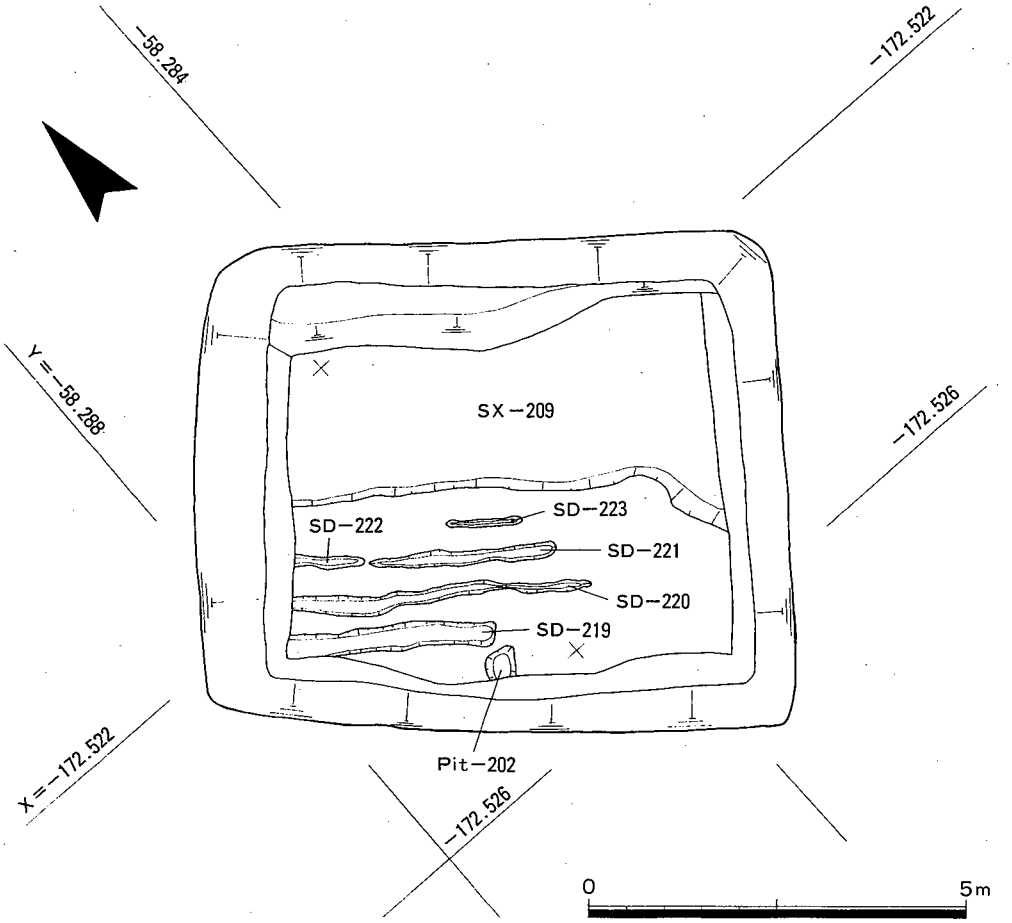


図７　第１区 第１遺構面 遺構配置図

第２区

第２遺構面（図８、図版３）

検出遺構は鋤溝と性格不明遺構である。鋤溝はほぼ東西方向に走るものとこれに直交するものを検出している。幅15～20cmを測り、灰オリーブ色土を埋土とする。現在の北境川の方向とはちがう区画であり興味深い。出土遺物は磁器染付が出土しており近世のものと見ることができる。

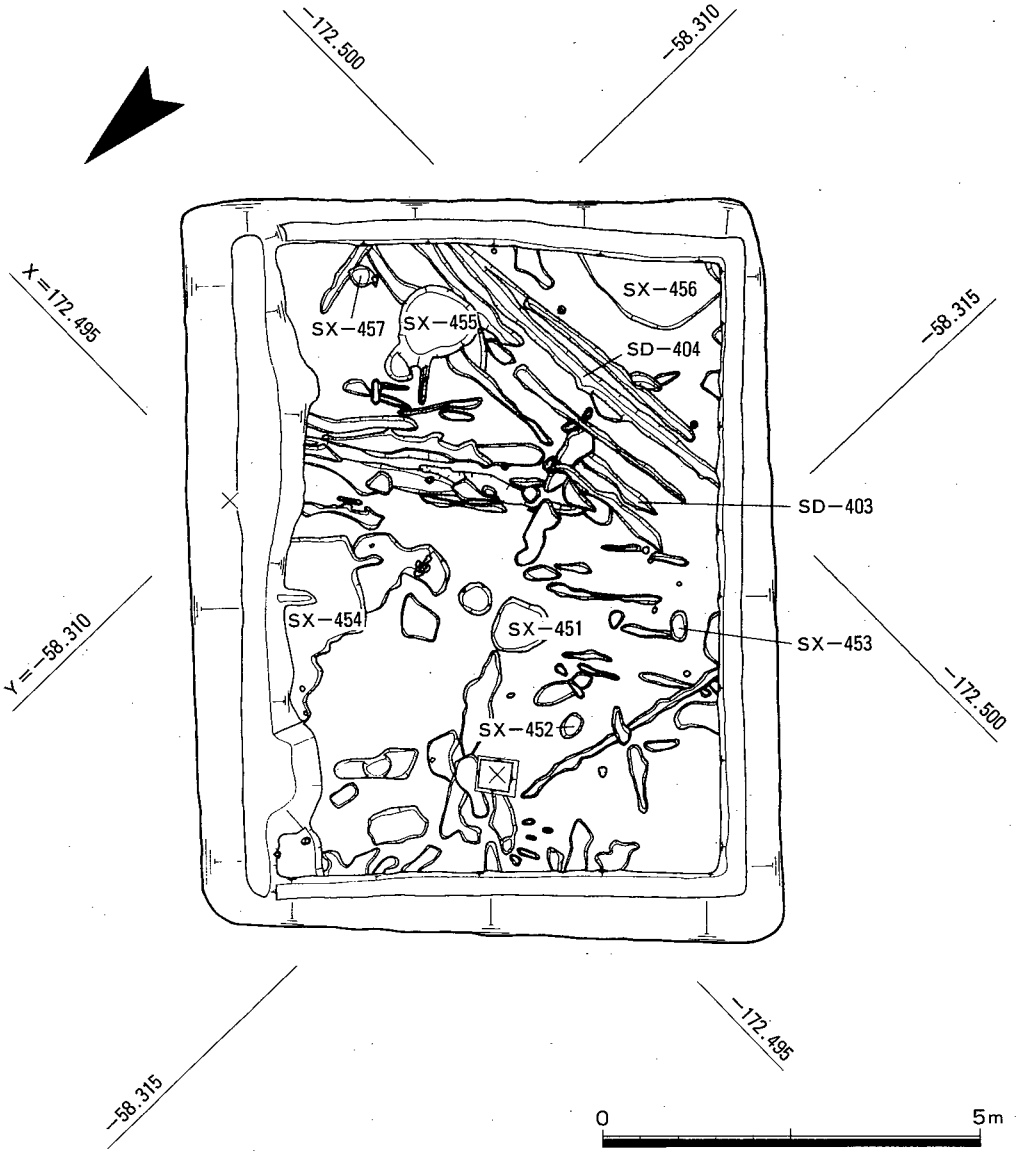


図８　第２区 第２遺構面 遺構配置図

第１遺構面（図９、図版４）

検出遺構のほとんどが鋤溝である。幅15～30cmを測り、耕作土を埋土としている。鋤溝の方向は北西一南東方向で北境川に沿った方向である。この鋤溝は北境川の方向に沿った形で耕作地の区画及び耕作が行われている。出土遺物から少なくとも近代以降にこのような区画が使用されていたようである。

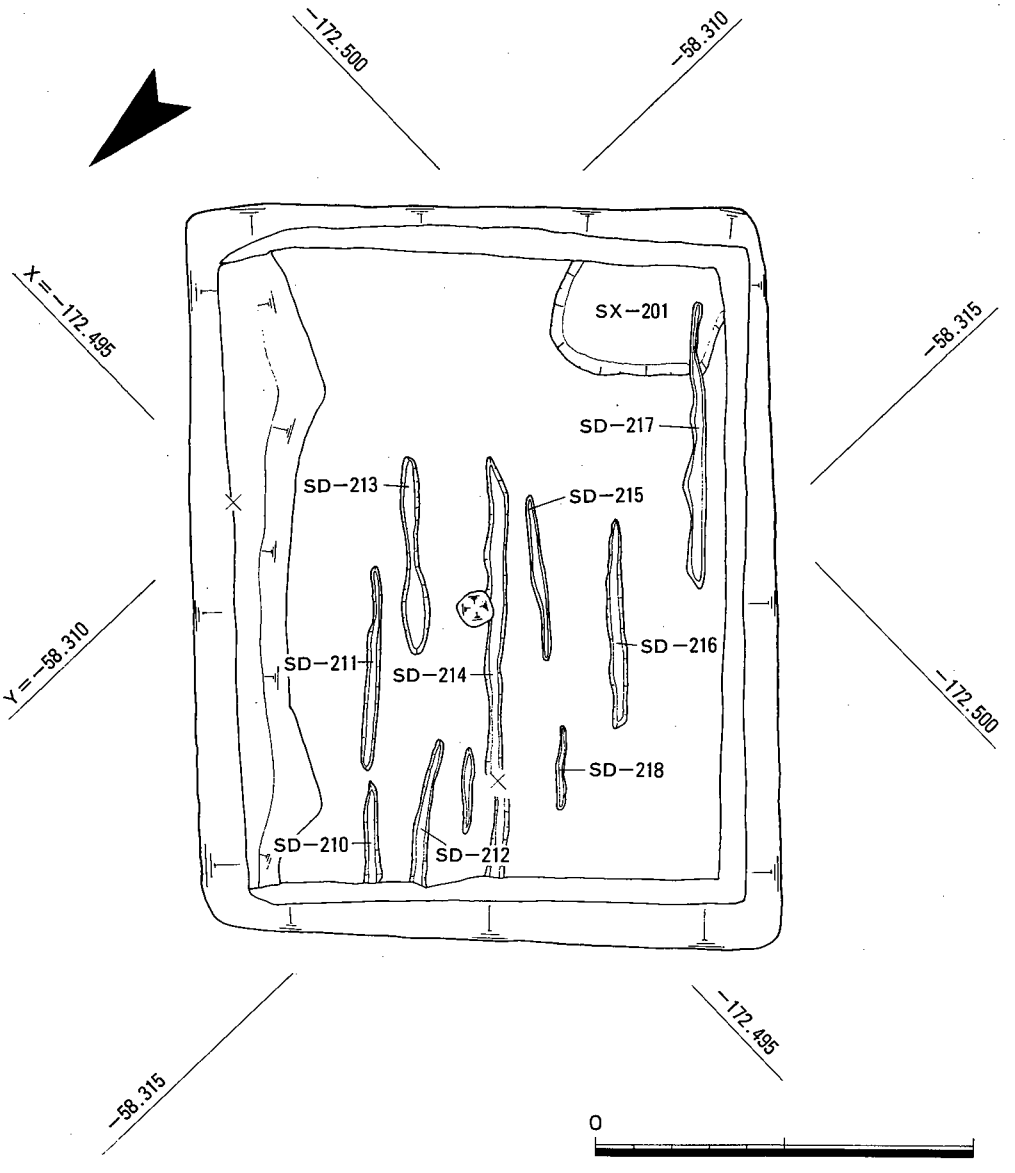


図９　第２区 第１遺構面 遺構配置図

第３区

第２遺構（図10、図版５、図版６）

地山上面において検出した遺構である。遺構はそのほとんどが粘土採掘土坑およびそれに関係する遺構である。以下、粘土採掘に関して状況の比較的良好な遺構について概要を説明する。

ＳＸ―407～ＳＸ―410（図版７）

本遺構はＨ・Ｇ―10～12区にて集中して検出した粘土採掘土坑である。灰色系砂質土（耕作土）を埋土とし、地山であるオリーブ灰色土及び灰白色粘土がブロック状に多く混じっており粘土採掘後、埋め戻し時に上部耕作土、地山土等が混じった状況がうかがわれる。粘土採掘は何度も行われており、埋め戻し土を再度掘削し、さらに粘土を掘削している様子が遺構の切り合い関係及び埋土の状況から想像できる。特にこの地区は、良好に粘土が見られたと考えられ現状地盤より１ｍ以上掘削を行った結果、地形を変え段差が生じたと考えられる。

出土遺物は、粘土採掘以前に存在していたと考えられる中世以前及び中世の包含層及び遺構を破壊していると考えられることから、須恵器、瓦器椀等の遺物が少量と上部に廃棄された近世陶磁器が多く出土している。

ＳＸ―440

調査区東側に位置する幅約11ｍを測る段上部の３分の１を占める広範囲な遺構である。埋土は淡黄灰色土で深さは30～40㎝を測る。土坑状を呈することなく連続的に広範囲に粘土採掘を行っており、埋め戻しは整地を行ったように均一で灰色土と黄色粘土の混じった埋土でよく締まっている。遺物はほとんど出土しておらず若干の瓦、磁器、陶器片が出土するのみである。

第１遺構面（図11、図版８、図版９）

耕作土を埋土とする遺構が多いと言える。段下部分では耕作土下部分ですぐに地山面を検出している部分もあり大きく掘削を受けていることが明らとなった。また、段上部分については市営住宅建設以前の長屋建物の便所と見られる遺構を６箇所で検出している。

ＳＫ―301

Ｅ―12区にて検出した遺構で粘土採掘後に廃棄土坑として利用された遺構である。長軸２ｍ短軸1.5ｍ、深さ約50㎝を測る。埋土は暗灰褐色土で地山粘土ブロックが混じる。遺物の出土状況から一時期に土を被せつつ廃棄、埋め戻しを行っていることがわかった。出土

遺物は瓦、陶磁器等が多数出土している。

ＳＫ—201～ＳＫ—207（図版10）

調査区東側段下部分に位置する遺構でほとんどが幅1.2ｍ～1.5ｍを測る長方形を呈する土坑で、埋土は耕作土及び暗灰褐色砂で廃棄土坑と廃棄後に貯水部分として使用されていたことも考えられる。出土遺物は瓦、陶磁器等が多く出土している。

ＳＸ—206・ＳＸ—207

Ｇ—10・11にて検出した性格不明遺構である。埋土はともに耕作土で深さは約５～10㎝を測る。出土遺物は、磁器、瓦片が出土している。

ＳＫ—101

Ｃ—９・10区にて検出した土坑である。出土遺物は、磁器、瓦片が出土している。

ＳＫ—102

Ｂ—10区にて検出した土坑である。出土遺物は、磁器、瓦片が出土している。

ＳＫ—103

Ｅ・Ｆ—13・14区にて検出した土坑である。幅約１ｍ長さ1.3ｍを測る。埋土は暗灰色砂質土で、出土遺物は磁器、瓦片が多く出土している。

ＳＫ—108

Ｄ・Ｅ—11・12区にて検出した土坑である。幅約１ｍ長さ2.2ｍを測る。埋土は暗黄灰色土で出土遺物は、磁器、陶器、瓦片が多く出土している。

ＳＫ—104

Ｃ・Ｄ—11にて検出した便所である。直径約１ｍ、深さ約20㎝を測る。木製槽を使用したもので瓦、磁器等が出土している。出土遺物から明治以降のものと考えられる。本遺構両側にコンクリート製の便所を検出している。

ＳＫ—106・ＳＫ—107

Ｄ・Ｅ—12・13区にて検出した便所である。直径１ｍ、深さ15㎝を測る。木製槽を使用し瓦等が出土している。出土遺物から昭和初期ごろのものと考えられる。

カクラン１～カクラン４

耕作土除去後に検出した廃棄土坑である。カクランとしているが下部から遺構を検出しているものがあり粘土採掘土坑の上部の遺構と考えることができる。そのため遺物は陶器、磁器、瓦等が多く出土しており、時期は19世紀から明治期のものが中心で粘土採掘後に掘られた廃棄土坑と見られる。

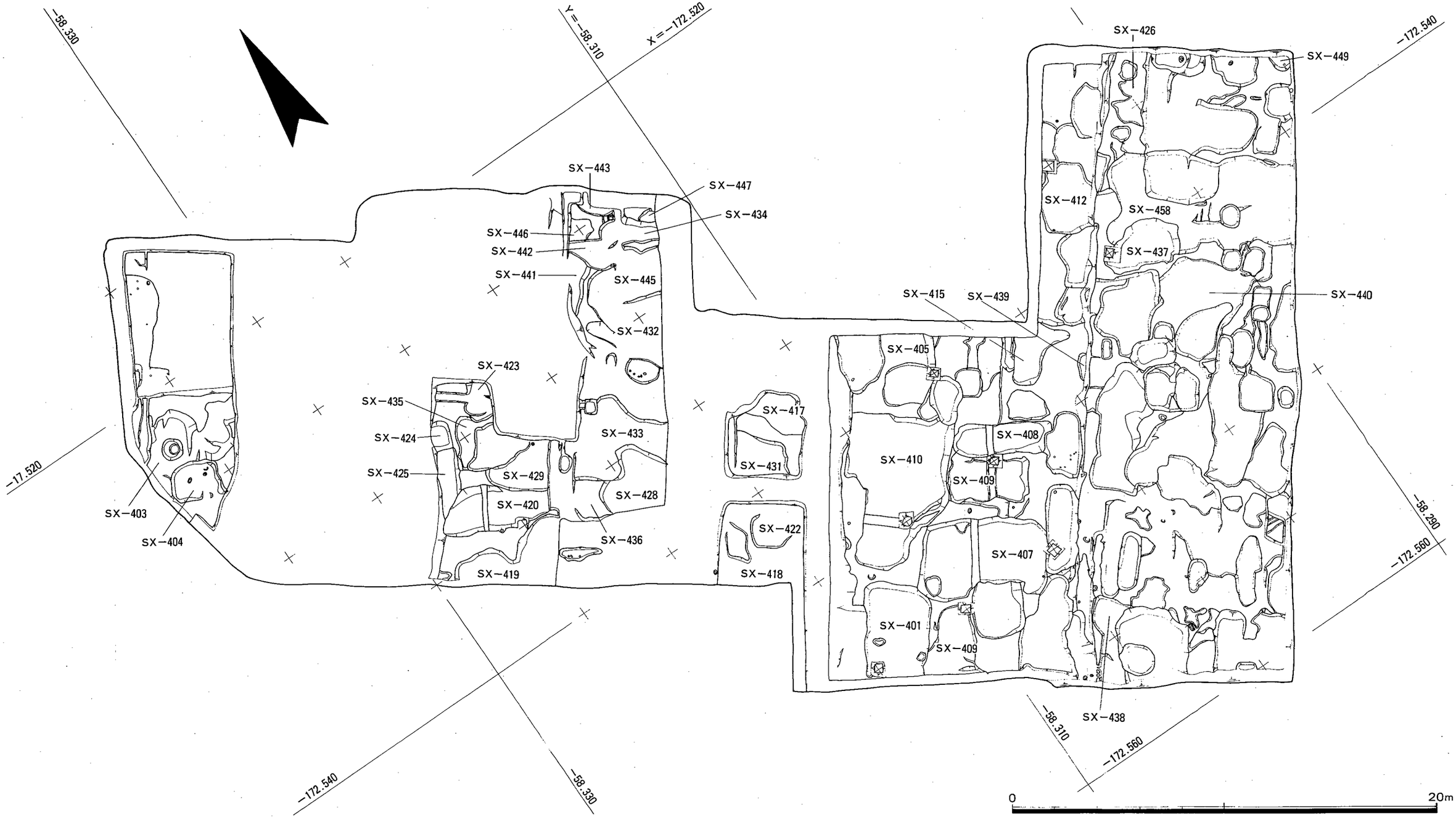


図10　第３区 第２遺構面 遺構配置図

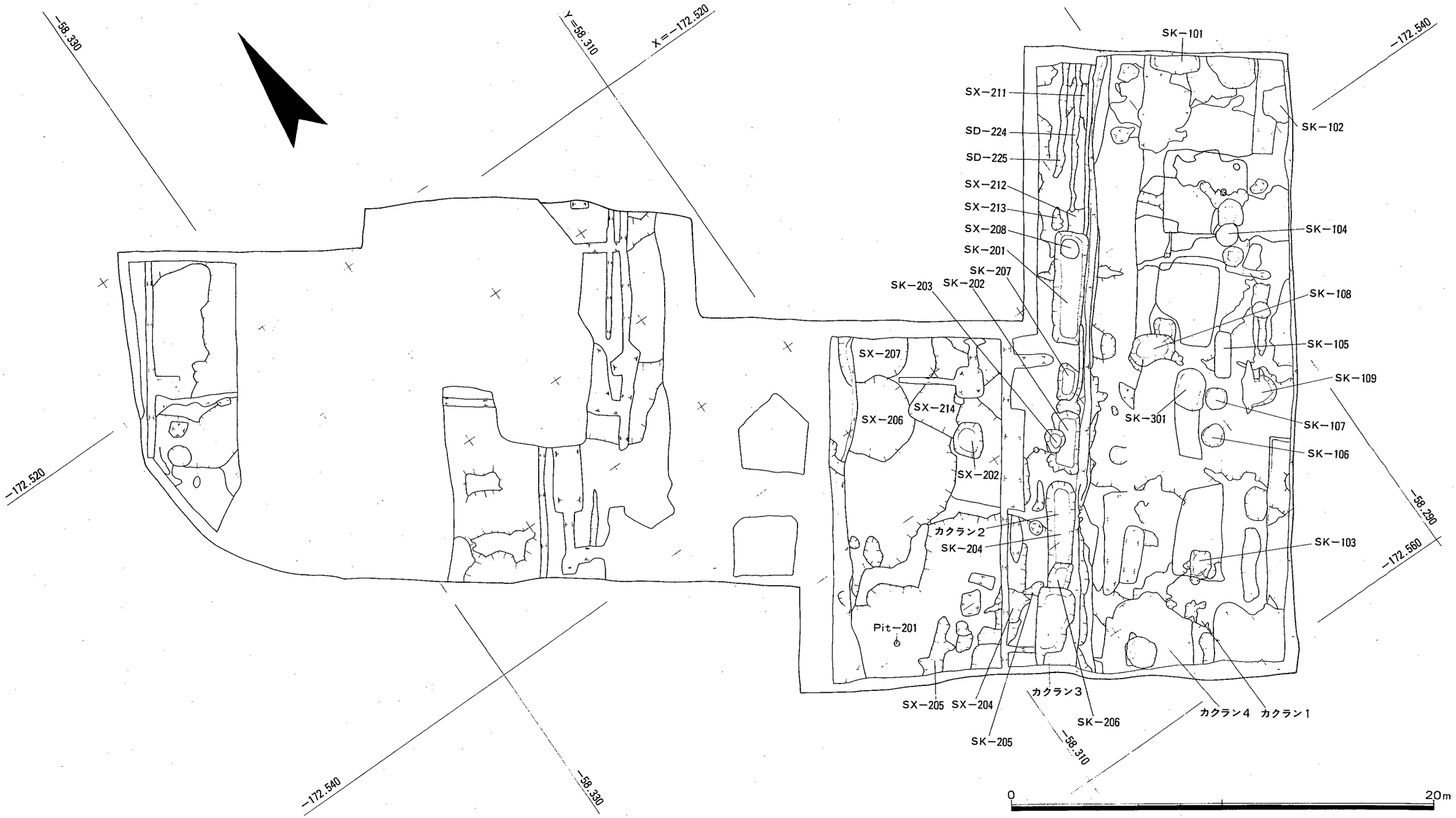


図11. 第3区 第1遺構面 遺構配置図

出土遺物

ＳＸ－401（図12、図13、図版11）

遺物はおおむね18世紀後半から19世紀前半のものが混在していると考えられる。1～19は磁器染付である。

１～４、７、８、11、12、17は丸形碗である。２は唐津刷毛目碗、３は二重網かけ文、７は丸文、見込みコンニャク印判五弁花文、８、11、17は見込みコンニャク印判五弁花文、５、６は蓋である。９は筒形湯飲み碗である。10、13～16は広東碗である。18は皿で、蛇ノ目凹形高台である。19はレンゲ上部である。

20、21は、土師質土錘である。

22は陶器ミニチュア釣瓶桶である。指オサエ、ナデで仕上げ外面に柿釉を施す。23は土師質火鉢である復元高台径17.4cmを測る。24は土師質土器焙烙である。25は堺すり鉢である。復元口径約30cmを測る。

ＳＸ－405（図14）

26～35、42は磁器である。26、30は蓋である。27、28は二重網かけ文、29は草花文を施す。32は端反り小皿である。33は白磁である。34は菊花文筒形湯飲み碗である。35は広東碗である。42は皿である。

36～41は陶器である。36は蓋である。37は灯明皿である。38は、器種不明底部片である。39、41は鍋である。39は内外面に釉薬を施し、底部付近にススの付着が見られる。41は口径18.4cmを測る。口縁端部は玉縁状を呈する。40は行平である。内外面に釉薬を施し、底部付近にススの付着が見られる。

43は瓦質火鉢底部片である。足部分が欠失している。44は土師質土器焙烙である。復元口径31.4cmを測る。

ＳＸ－406（図15、図16）

45～47は磁器である。45は口径5.2cmを測る小杯である。46は口径7.8cmを測る内外面に染付を施す碗である。47は口径９cmを測る丸形碗である。外面に染付を施す。

68は復元口径14.2cmを測る陶器行平である。外面にトビカンナを施す。78は土師質土錘である。

ＳＸ－408（図16）

85は最大径5.5cm、長さ4.8cmを測る土師質土錘である。

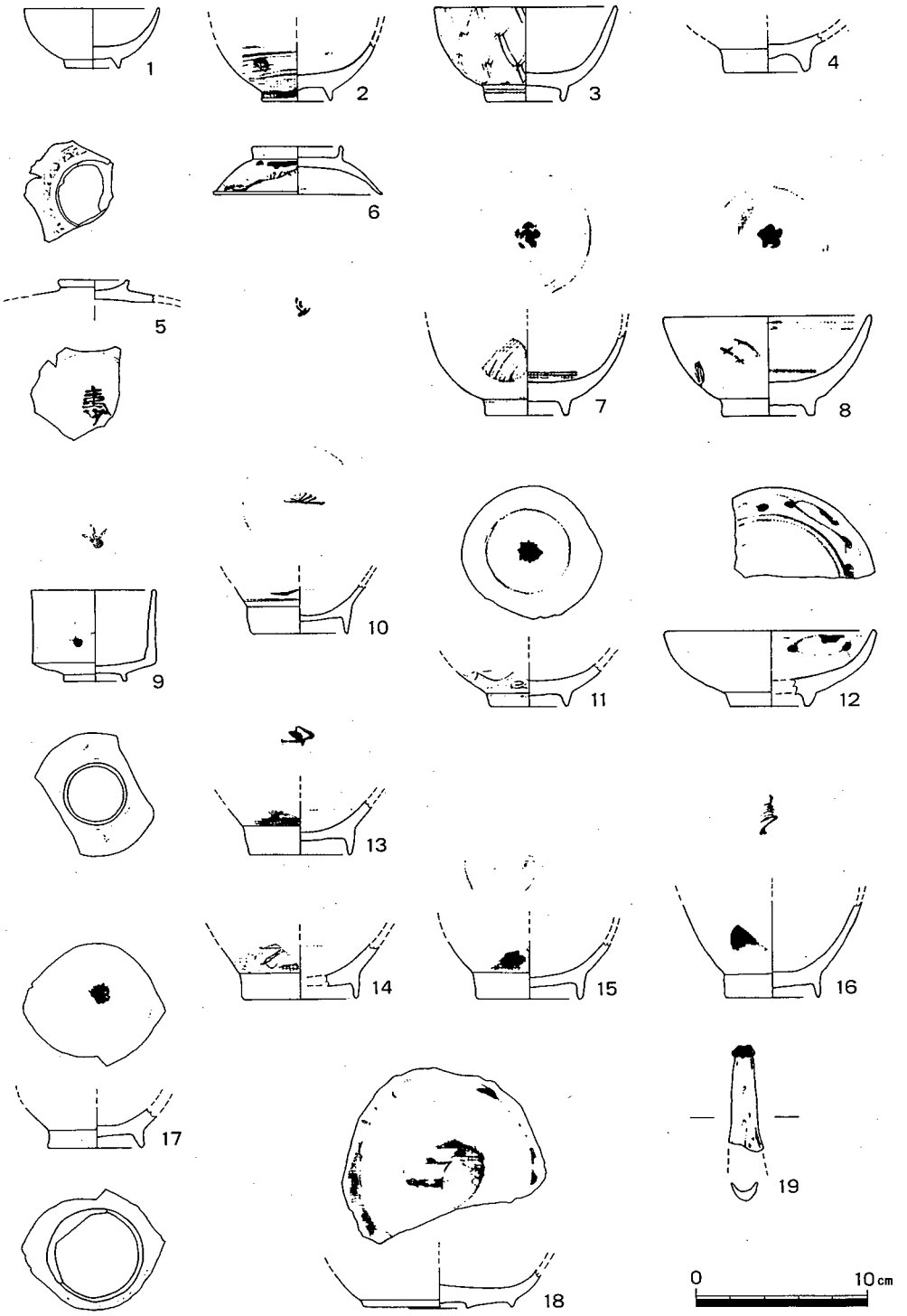


図12　SX－401 出土土器

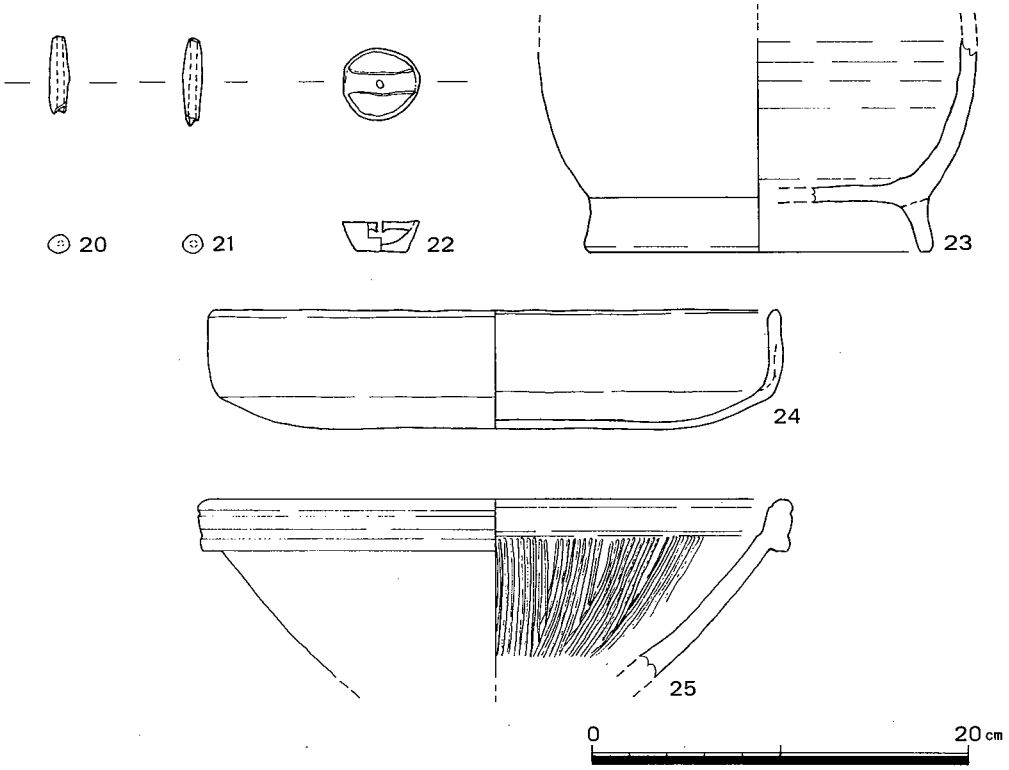


図13　SX－401 出土遺物

SX－410（図16）

72は復元口径19.2cmを測る堺すり鉢である。

SX－412（図15、図16、図版11）

48は復元口径6.2cmを測る磁器染付小杯である。51は復元口径8.6cmを測る端反り小皿である。52は染付蓋である。56は肥前磁器染付皿である。内面に楼閣文を描く。69は復元口径13cmを測る瀬戸陶器壺である。70は長さ11.4cmを測る陶器蓋である。つまみは貼り付けで外面に柿釉を施す。

SX－413（図15、図16、図版12）

50は印判染付碗である。型紙摺絵法による模様で外面に青海波文と白抜きで「大」の字、内面口縁部に輪宝つなぎ文を施す。71は陶器おろし板である。77は土師質メンコである。円形で表に三つ巴文を型とりをする。

SX－414（図16）

76は土師質メンコである。直径3.3cm、厚さ5mmを測る。円形で幾何学的な文様を型とりする。

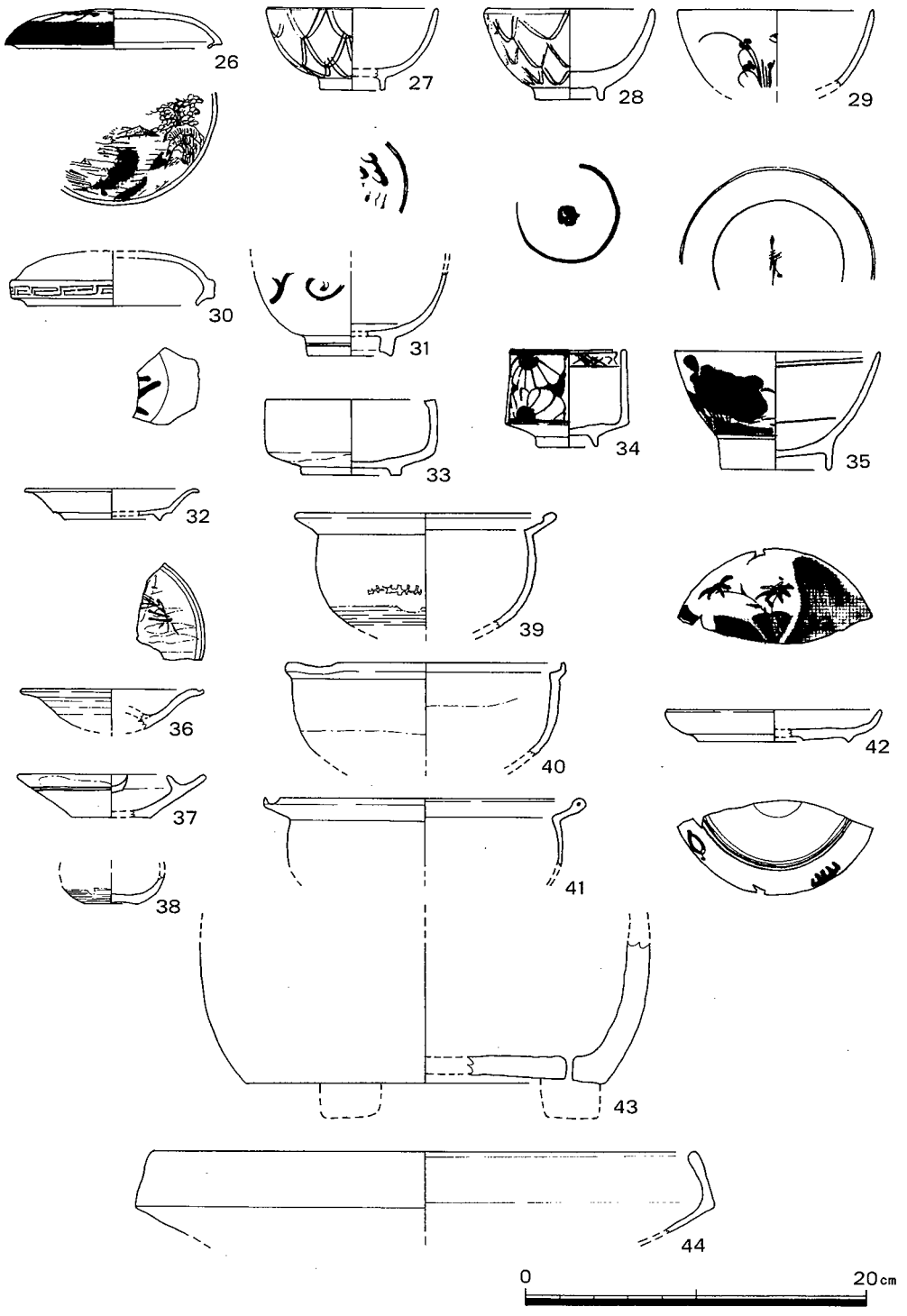


図14　SX－405 出土土器

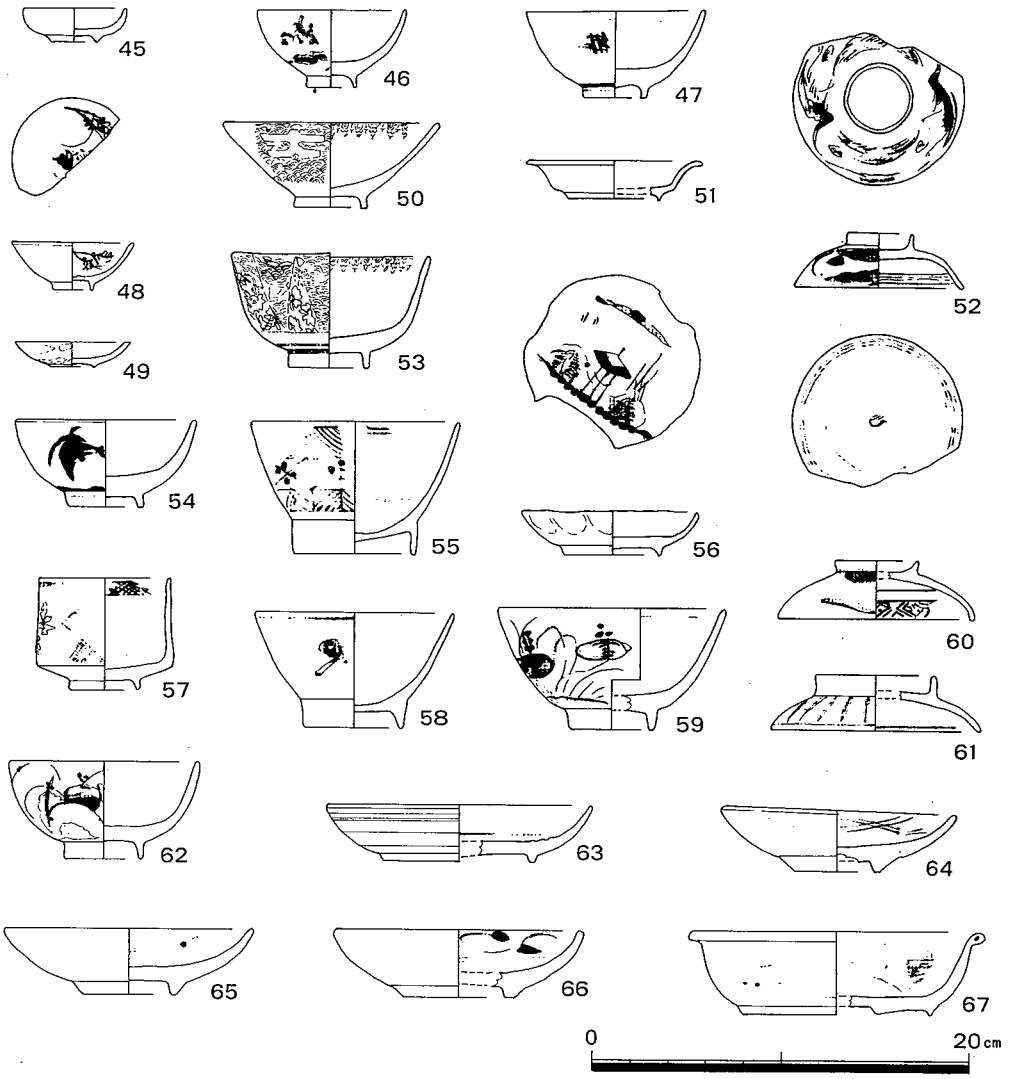


図15　SX－406(45～47)、SX－412(48、51、52、56)、SX－413(50)、SX－416(53)、SX－418(55)、SX－420(63)、SX－428(60、61、64)、SX－432(49)、SX－433(57～59、62、65～67)、SX－456(54)出土土器

ＳＸ－416（図15）

53は磁器印判染付碗である。型紙摺絵法により文様を施す。

ＳＸ－418（図15、図16）

55は瀬戸焼磁器染付広東碗である。復元口径10.8cmを測る。75は土師質メンコである。表に青海波文を型とりする。

ＳＸ－420（図15、図16）

63は肥前磁器染付皿である。復元口径13.8cmを測る。80、81は土師質土錘である。

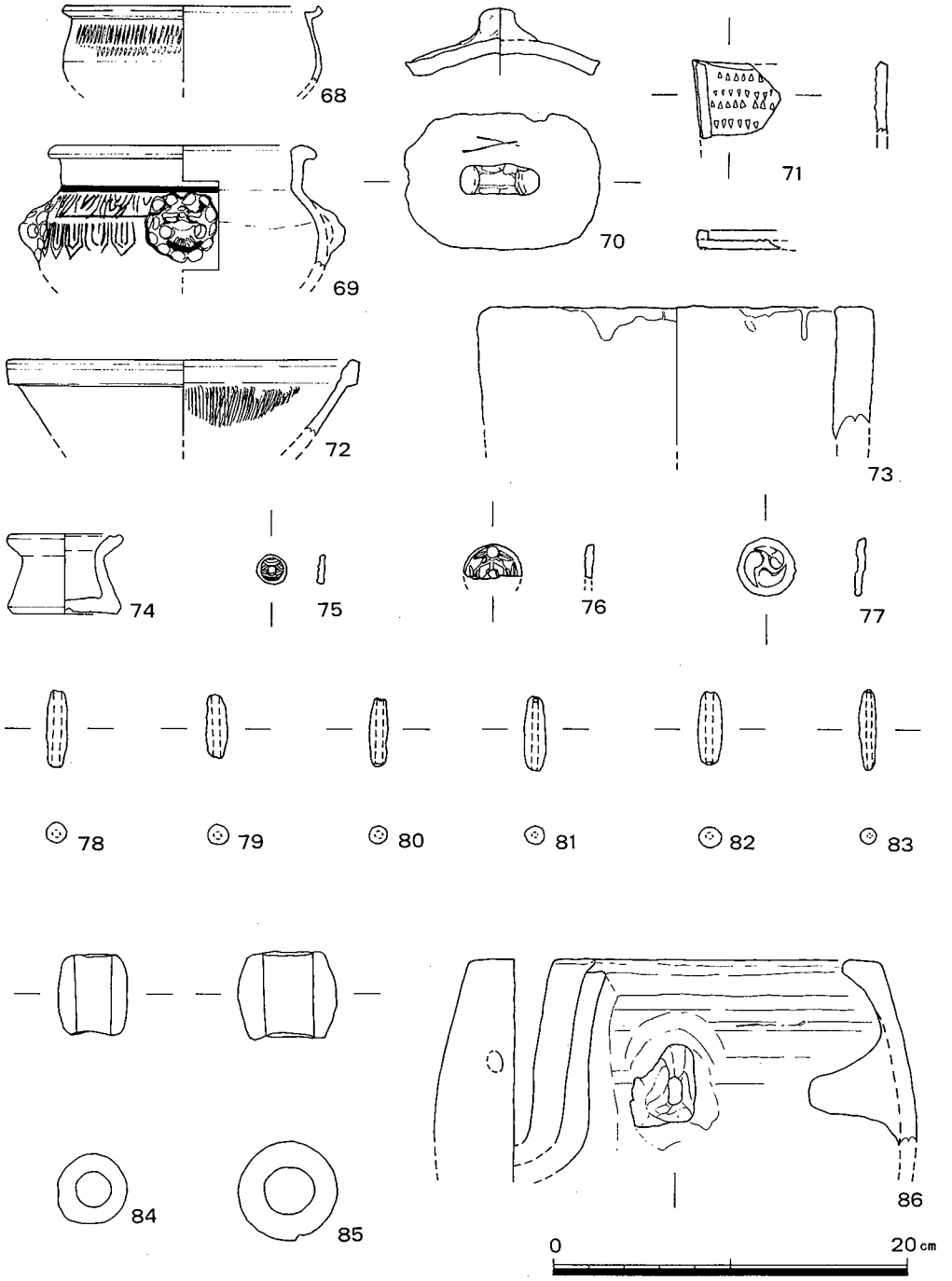


図16　SK－406(68、78)、SX－408(85)、SX－410(72)、SX－412(69、70)、SX－413(71、77)、SX－414(76)、SX－418(75)、SX－420(80、81)、SX－424(79)、SX－428(86)、SX－433(74)、SX－448(82、83)、SX－451(73、84)出土遺物

ＳＸ—424（図16）

79は土師質土錘である。直径1.2cmを測り手づくね整形し指ナデで仕上げる。

ＳＸ—428（図15、図16）

60、61は磁器染付蓋である。60は口径約10cmを測る。61は口径約12cmを測る。64は肥前磁器皿である。内面松葉文を描き見込みには蛇ノ目釉ハギがみられ、底部は蛇ノ目凹形高台である。

86は土師質風炉竈である。内面にススの付着が見られる。

ＳＸ—432（図15）

49は口径5.2cmを測る白磁紅皿である。型打成形で外面に放射線文様を施す。口縁部が平坦で、器高も1.3cmと浅い。

ＳＸ—433（図15、図16）

57～59、62、65～67は磁器染付である。

57は筒形湯飲み碗である。58は広東碗である。口径10.4cmを測る。59、62は肥前丸形碗である。59は口径11.8cmを測り、外面に草花文を描く。62は口径9.8cmを測る。65、66は肥前皿である。65は復元口径12.8cmを測る。見込みには蛇ノ目釉ハギが見られる。66は復元口径12.8cmを測る。見込みにはややつぶれたコンニャク印判五弁花文、蛇ノ目釉ハギが見られる。67は口径15cmを測る鉢である。口縁部は折り曲げられ丸くおさまる。底部は蛇ノ目凹形高台である。

74は器種不明の瓦質土器である。ほぼ完形で口径約10cmを測る。底部は回転糸切り未調整で底部で曲折しやや内側に直線的に立ち上がり、口縁部下でくの字状を呈し、口縁部は外方に向かい丸くおさまる。

ＳＸ—488（図16）

82、83は土師質土錘である。82は直径1.3cmを測る。83は直径0.9cmを測り手づくね整形し指ナデで仕上げる。

ＳＸ—451（図16）

73は復元口径18.2cmを測る匣鉢である。口縁部の破片で外面に自然釉が付着するもので本調査地周辺部で使用されたものである可能性がある。

84は直径4.8cm、長さ4.5cmを測る土師質土錘である。

ＳＸ—456（図16）

54は肥前磁器染付丸形碗である。復元口径1.2cmを測る。

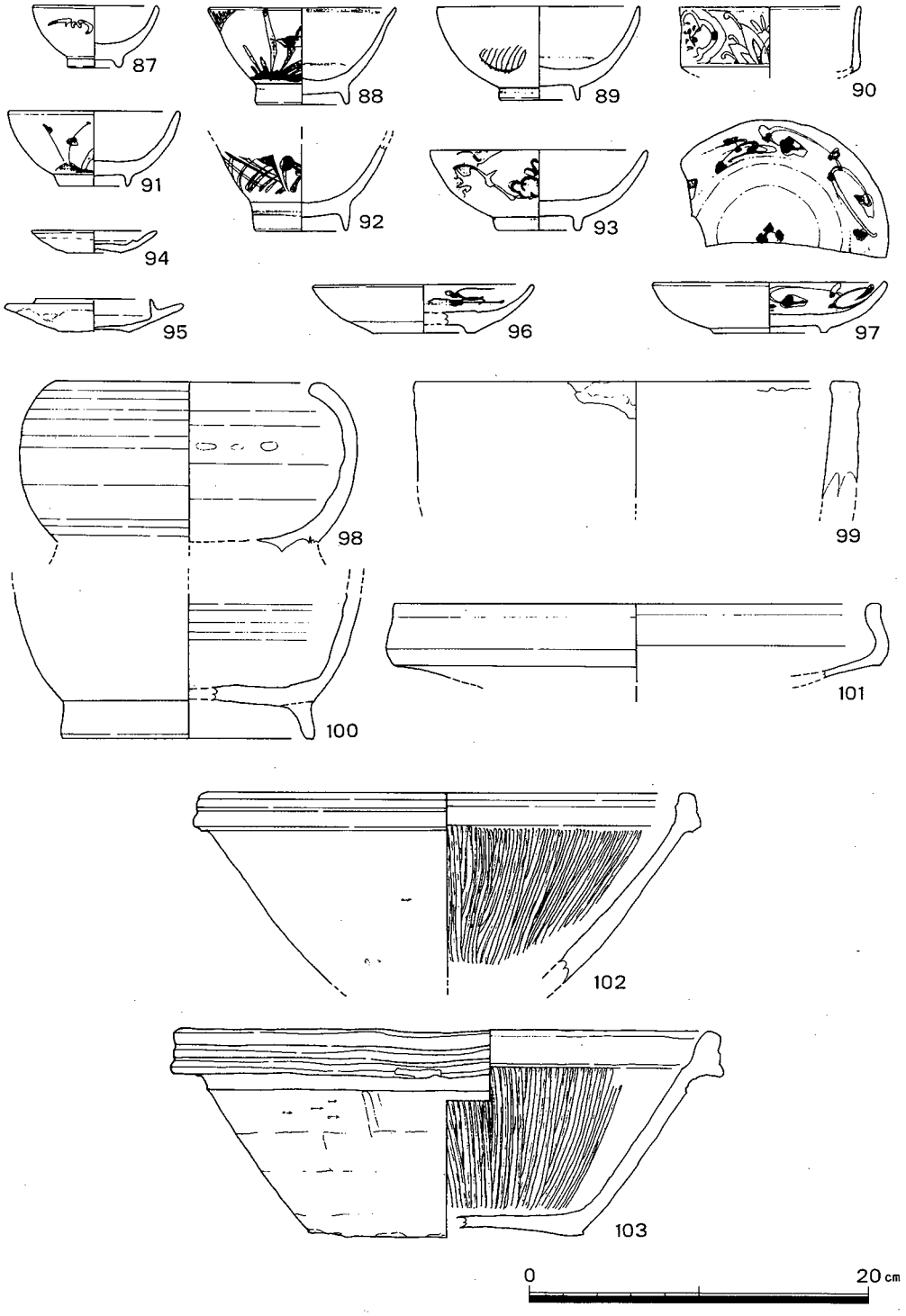


図17　SK－301 出土土器

ＳＫ—301（図17）

87～93、96、97は磁器染付である。

87は小杯である。口径6.8cmを測る。88、92は瀬戸広東碗である。88は口径10.6cmを測る。92は口縁部を欠失している。復元高台径５cmを測る。

89、91、93は肥前丸形碗である。89は口径11.4cmを測り、外面に丸文を描く。内面見込み部に蛇ノ目釉ハギが見られる。91は口径9.8cmを測る。93は口径12.2cmを測る。

90は筒形碗である。復元口径9.8cmを測る。

96、97は皿である。96は復元口径12.6cmを測る。97は復元口径13.2cmを測る。見込み部にコンニャク印判五弁花文を施す。

94、95は陶器灯明皿である。94は口径6.8cmを測る。底部に回転糸切り痕を有し、底部を除く内外面に柿釉を施す。95は内面及び口縁部まで釉薬を施す。98は瓦質火鉢である。底部を欠失しており復元口径15cmを測る。99は復元口径23cmを測る匣鉢である。自然釉が付着する。100は土師質火鉢底部片である。

101は土師質土器焙烙である。復元口径27.6cmを測る。底部を欠失しているが外面にススの付着が見られる。

102、103は堺すり鉢である。102は復元口径27.8cmを測る。103は復元口径30.4cmを測る。

ＳＫ—201（図19）

119は陶器蓋である。外面に釉薬を施す。

ＳＫ—202（図18、図19）

106は磁器染付蓋である。復元口径9.8cmを測る。内外面に染付を施す。108は磁器染付小杯である。復元口径７cmを測る。外面に染付を施す。

121は陶器小杯である。口径約3.8cmを測る。外面に文字を記すが判読できない。130は仏花瓶である。高台径3.2cmを測る。底部を除いて緑灰色の釉を施す。

ＳＫ—203（図18、図19）

111は復元口径8.4cmを測る瀬戸磁器染付碗である。外面、内面見込み部に染付を施す。

126は陶器蓋である。135、139は陶器行平である。135は復元口径18.6cmを測る。内面及び外面体部に釉薬を施す。底部露胎部分にススの付着が見られる。139は口径16.6cmを測る。内面及び外面体部に釉薬を施す。底部露胎部分にススの付着が見られる。138は復元底部径20.8cmを測る陶器である。

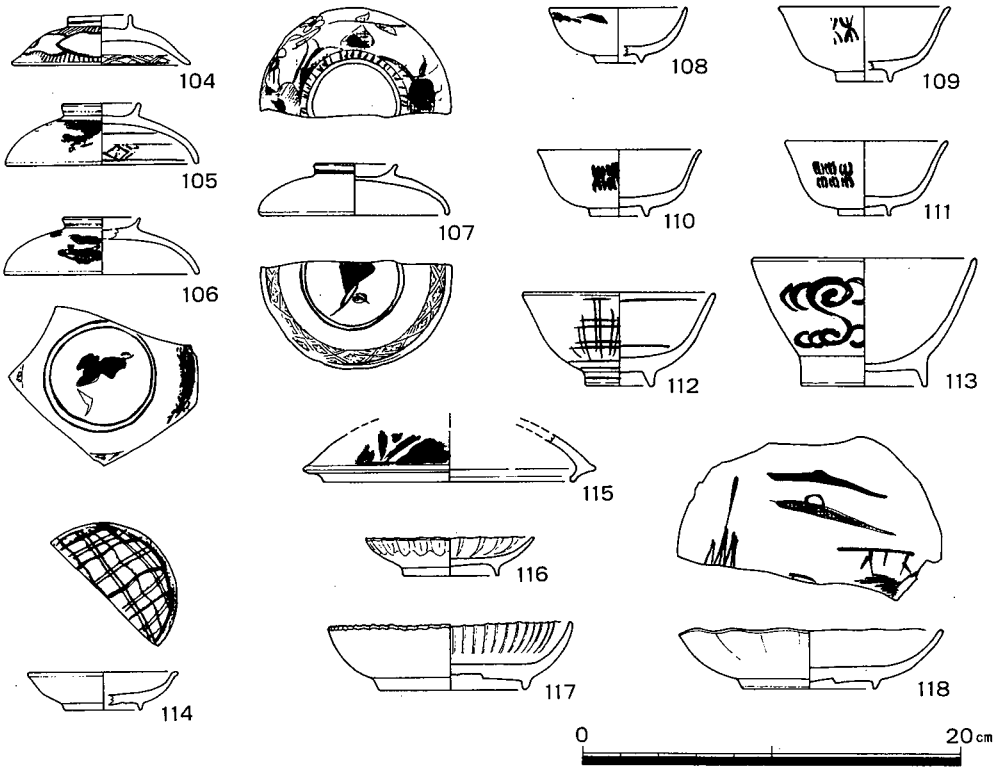


図18　SK－202(106)、SK－203(111)、SK－204(109、112、114)、SK－207(105、107)、SX－202(117)、SX－208(118)、SX－209(104、110、113、115、116)出土土器

SK－204（図18、図19、図版12）

109は復元口径8.8cmを測る瀬戸磁器染付碗である。112は口径9.8cmを測る磁器染付碗である。外面に格子文を施す。114は復元口径7.6cmを測る磁器染付小皿である。

122は灯明皿である。全面に釉薬を施す。

123は赤膚焼陶器小鉢である。ほぼ完形で口径9.2cmを測る。底部高台やや上に「赤ハタ」の刻印が見られる。137は陶器行平である。口径16.2cmを測る。

SK－207（図18、図19）

105、107は磁器染付蓋である。105は復元口径10cmを測る。107は口径9.8cmを測る。

134は復元口径12.4cmを測る陶器である。素焼きのものとみられ内面に接合痕が残る。

SD－201（図19、図版12）

120は復元口径３cmを測る陶器である。内外面に釉薬、外面に文様を施す。

127、128は土師質土メンコである。127は直径3.4cmを測る円形で表に三つ巴文を型とりする。128は直径3.4cmを測る円形で表に模様を型とりする。

138は18.4cmを測る陶器口縁部片である。内外面に釉薬を施す。

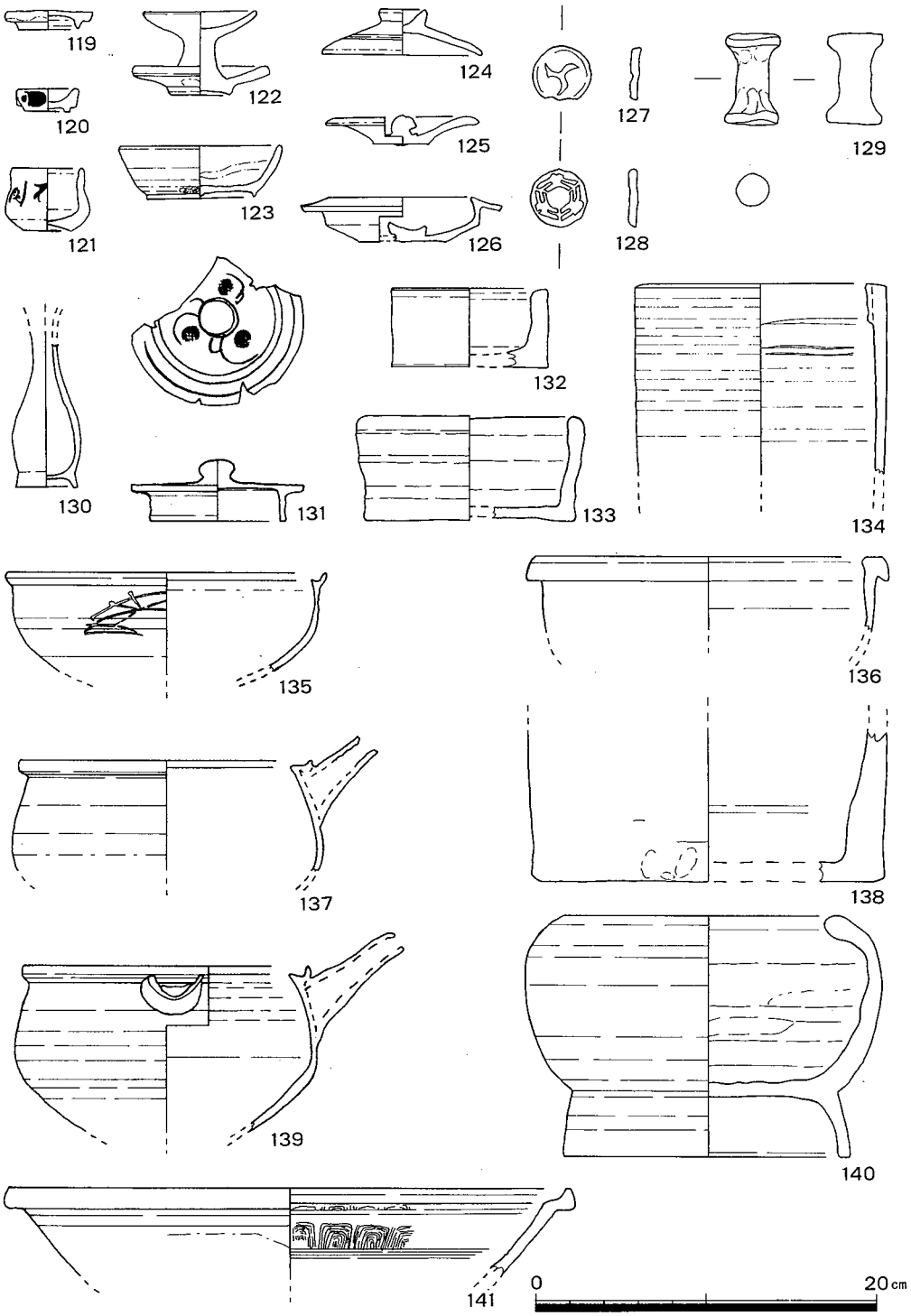


図19　SK－201(119)、SK－202(121、130)、SK－203(126、135、139)、SK－204(122、123、137)、SK－207(134)、SD－201(120、127、128、138)、SX－202(129、140)、SX－203(141)、SX－208(131、132)、SX－209(124、125)、SX－211(133)出土遺物

ＳＸ—202（図18、図19）

117は復元口径12.6cmを測る白磁輪花皿である。底部は蛇ノ目凹形高台である。129は瓦質の糸巻きと考えられる。長さ5.2cm、糸巻き部直径1.9cmを測る。140は瓦質火鉢である。復元口径14cmを測る。

ＳＸ—203（図19）

141は復元口径32.4cmを測る陶器鉢である。

ＳＸ—208（図18、図19、図版12）

118は口径13.8cmを測る磁器染付皿である。内面に染付を施す。

131は口径7.2cmを測る陶器蓋である。132は復元口径８cmを測る陶器である。

ＳＸ—209（図18、図19、図版11）

104、115は磁器染付蓋である。104は復元口径9.2cmを測る。内面中央部に「寿」の字が書かれる。115は復元口径12.8cmを測る。110は口径8.6cmを測る瀬戸磁器染付碗である。113は口径11.6cmを測る瀬戸磁器染付広東碗である。116は口径8.6cmを測る白磁輪花皿である。

124、125は陶器蓋である。125は底部に回転糸切り痕を有し底部以外に釉薬を施す。

ＳＸ—211（図19）

133は11.6cmを測る陶器である。

ＳＫ—101（図20、図版13）

157は復元高台径７cmを測る瀬戸磁器染付広東碗である。145、159は波佐見磁器染付皿である。145は復元口径13.8cmを測る。159は口径約19cmを測る。内面に草花文を描き、見込み部にコンニャク印判五弁花文を施す。

163は陶器片口である。復元口径12.2cmを測り、外面底部を除く内外面に釉薬を施す。内面に重ね焼きの痕跡が残る。

ＳＫ—102（図20、図版12、図版13）

144、148～151は磁器染付碗である。

144、148は瀬戸産と考えられる。144は復元口径8.6cmを測る。148は口径8.6cmを測る。149は口径8.8cmを測る。150は口径10.2cmを測る。151は口径11cmを測る。焼成時の失敗であろうか染付が不完全で模様が薄い。156は磁器染付急須である。口径６cmを測る。153は磁器染付小皿である。内面見込み部に桔梗の花、口縁部下にタコ唐草文を描く。161は陶器灯明皿、164は陶器土瓶蓋、166は陶器片口である。

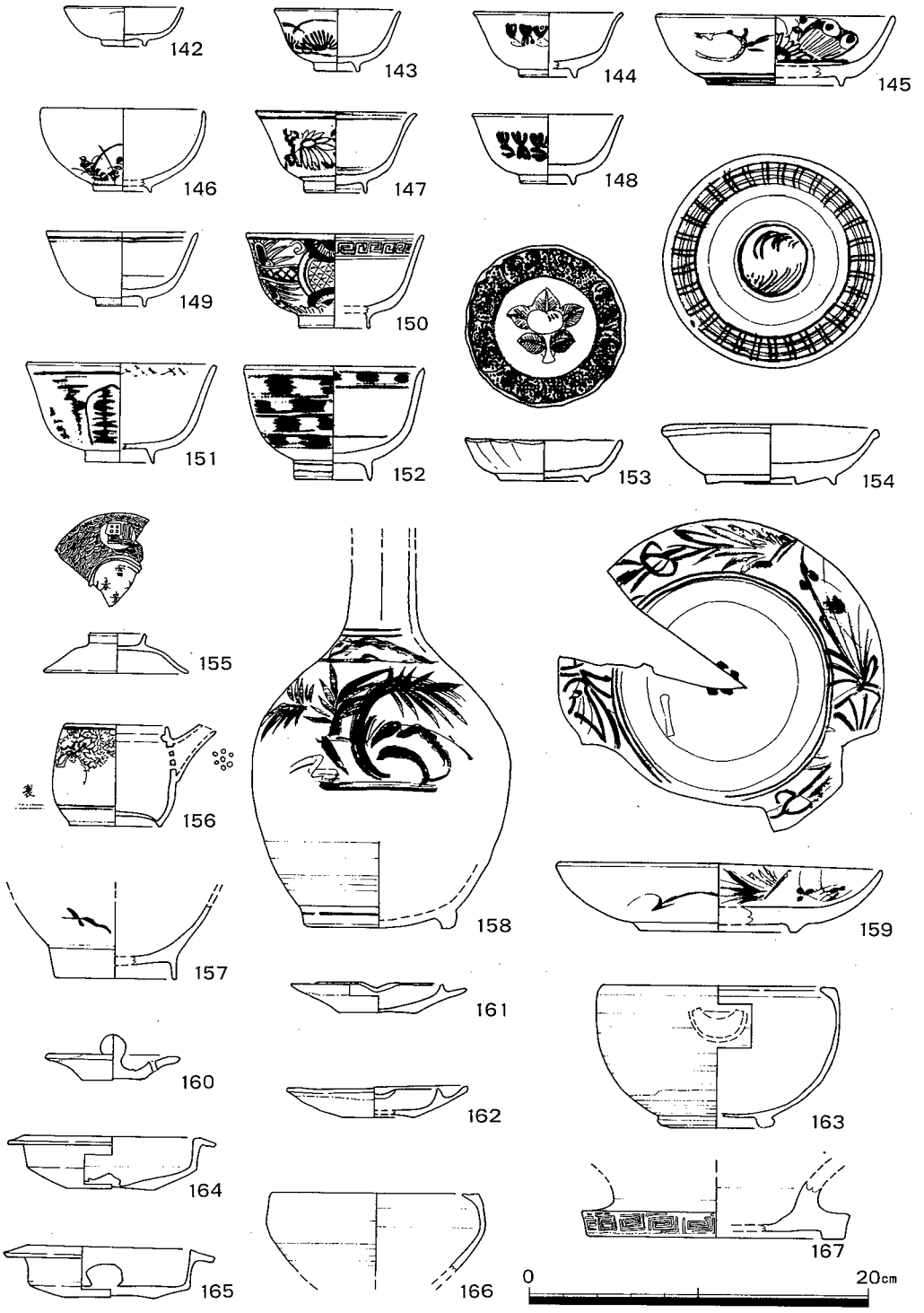


図20　SK－101(145、157、159、163)、SK－102(144、148～151、156、153、161、164、166)、SK－103(142、143、146、147、152、154、155、158、160、161、165、167)出土土器

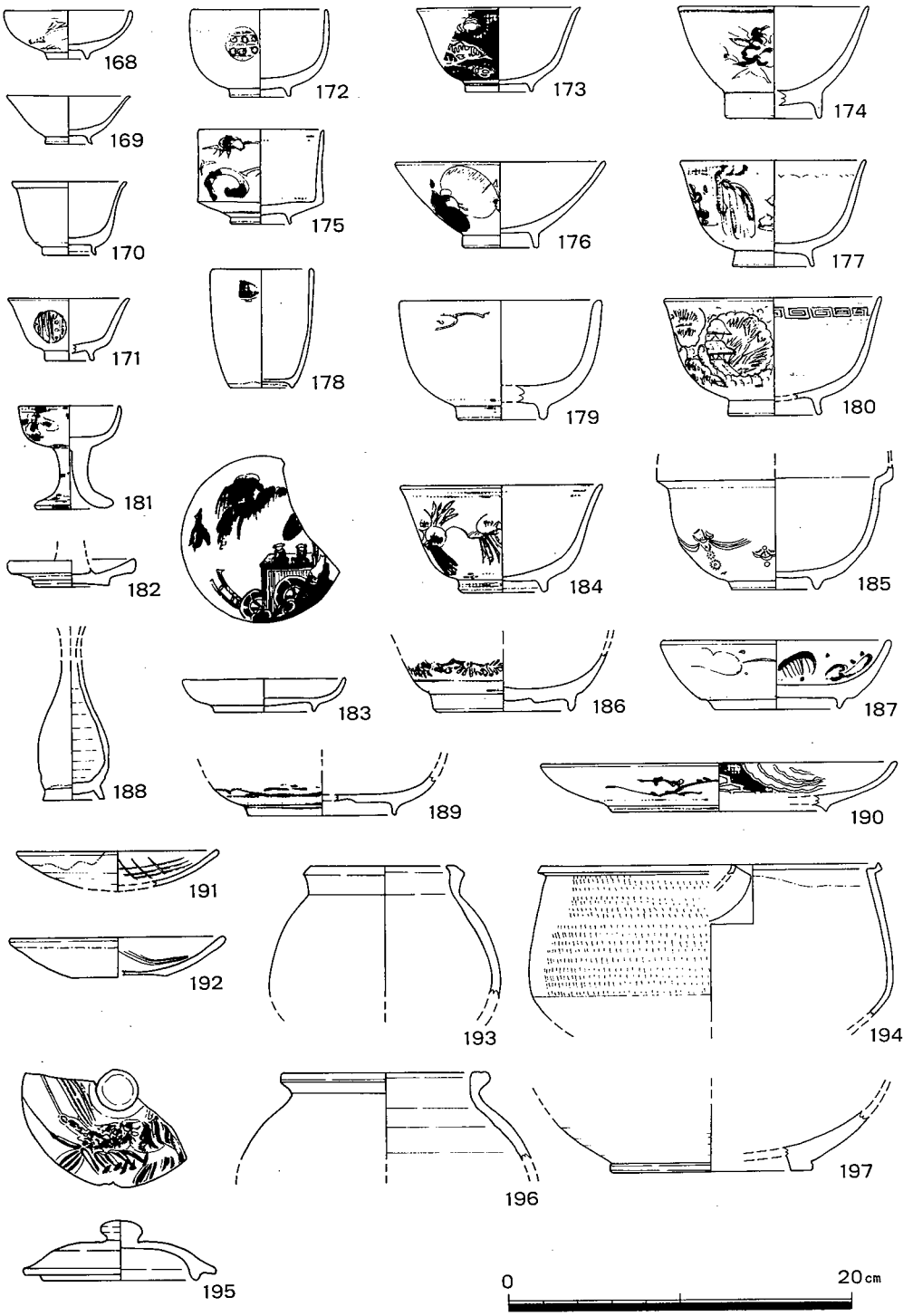


図21　SK－104(176、178、179、195)、SK－106(169、170、181、183、186)、SK－108(171、173、174、187、190～194、196)、SK－109(168、172、175、177、180、182、184、185、188、189、197) 出土土器

ＳＫ―103（図20、図版13）

142、143、146、147、152は磁器染付碗である。154は磁器染付皿である。口径約12.2㎝を測る。内面に格子文を描く。155は磁器染付蓋である外面に青海波文、丸文の中に「福」の字を書く、内面口縁部に青海波文、見込み部に「寿」の字を書く。158は肥前磁器染付瓶である。底部径約８㎝を測る。

160は陶器蓋である。161は陶器灯明皿である。165は陶器土瓶蓋である。167は陶器底部片である。雷文のスタンプで文様を施す。

ＳＫ―104（図21）

176は口径12㎝を測る磁器碗、179は復元口径11.4㎝を測る磁器染付碗である。

178は陶器湯飲み碗、195は陶器蓋である。宝珠つまみを持ち、外面に伊勢海老を描く。

ＳＫ―106（図21）

169、170は白磁小杯である。181は肥前磁器染付仏飯器である。183は磁器染付皿である。口径9.2㎝を測る。外面に唐草文、内面に柳、鳥、車を描く。186は磁器染付皿である。高台径7.6㎝を測り、内外面に型紙摺絵で草花文を施す。底部は蛇ノ目凹形高台である。

ＳＫ―108（図21）

171は磁器染付小杯である。口径6.8㎝を測り、外面に丸文を描く。173は磁器染付碗である。内面見込み部に「寿」の字を書く。174は磁器染付広東碗である。187は波佐見磁器染付皿である。見込み部にコンニャク印判五弁花文を施す。190は磁器染付皿である。

191、192は陶器皿である。191は復元口径11.4㎝を測る。192は口径12.2㎝を測る。193、196は陶器壺である。193は復元口径7.4㎝を測る。196は復元口径10.2㎝を測る。194は陶器行平である。復元口径19.6㎝を測る。外面にトビカンナを施す。

ＳＫ―109（図21）

168は磁器染付小杯である。172、177、180、184は磁器染付碗である。175は磁器染付筒形碗である。内面見込み部にコンニャク印判五弁花文を施す。185は磁器蓋付き碗である。189は磁器染付皿である。復元高台径8.2㎝を測り、内外面に染付を施す。182は灯明台底部片である。188は陶器仏花瓶である。197は陶器底部である。

カクラン２（図22、図版14）

198は陶器染付蓋である。ほぼ完成で口径９㎝を測り、内外面に型紙摺絵で模様を染付する。207は磁器染付大皿である。内面に氷結文、馬の目文、丸文内に草花を描く。

203は陶器小杯である。復元口径４㎝測り、外面に「□大花の□」と書く。205は陶器壺

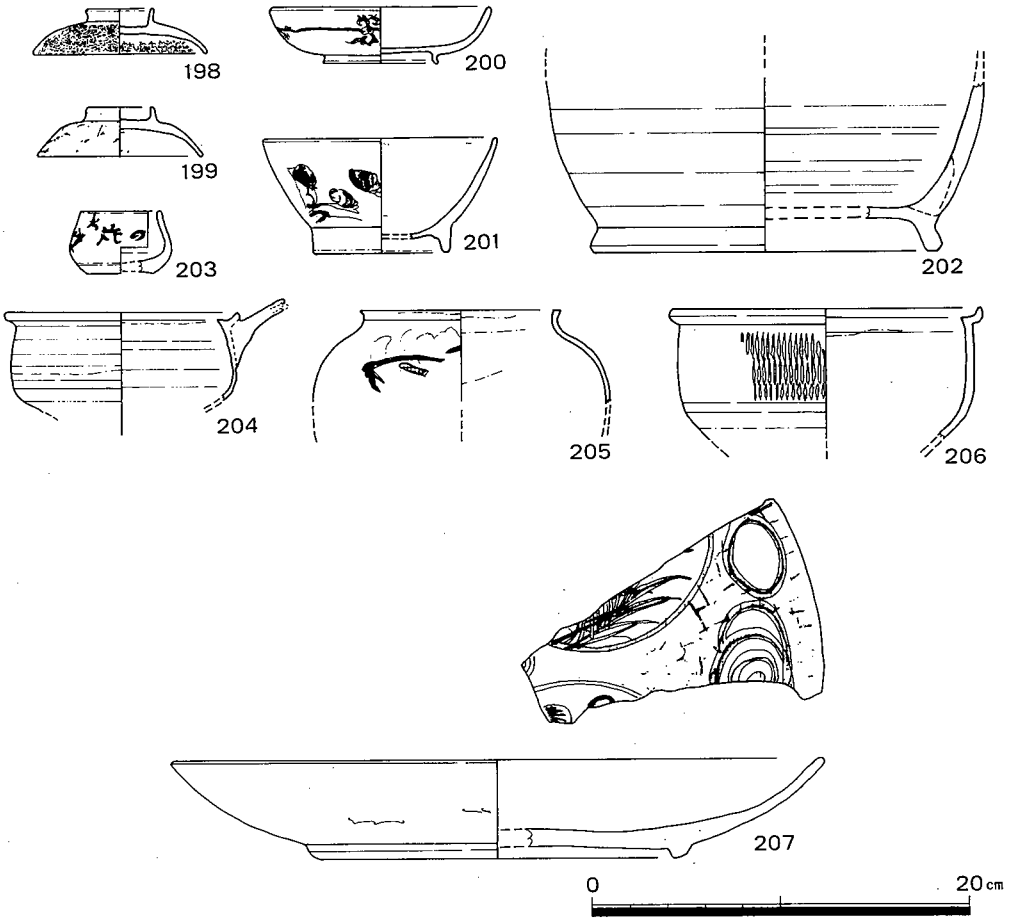


図22　カクラン2(198、202、203、205～207)、カクラン3(199)、カクラン4(200、201、204)出土土器

である。206は陶器行平である。外面にトビカンナを施す。202は土師質竈である。内面にススの付着が見られる。

カクラン3（図22）

199は磁器染付蓋である。口径8.4cmを測る。

カクラン4（図22）

200は陶器染付皿である。復元口径11.4cmを測る。201は磁器染付広東碗である。復元口径12.2cmを測る。

204は陶器行平である。復元口径12.2cmを測る。

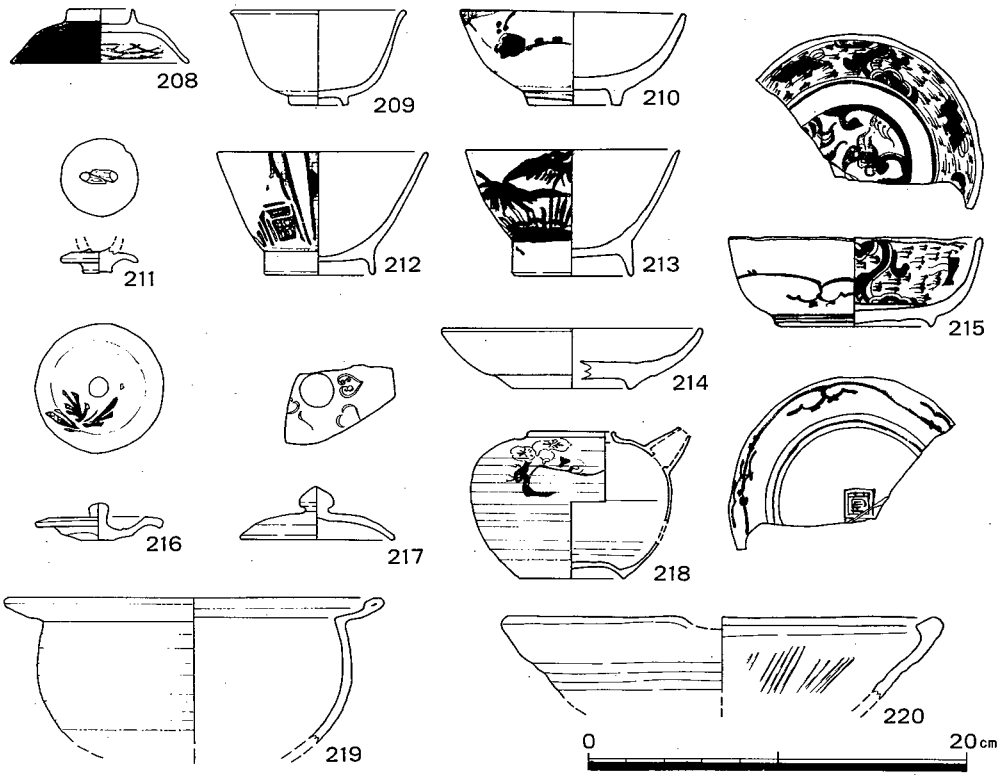


図23　包含層第3層 出土土器

包含層第3層（図23）

208、210、212～215は磁器染付である。208は蓋である。210は丸形碗である。212、213は広東碗である。214は皿である。215は鉢で底部に焼継ぎが見られる。209、211、216～220は陶器である。

209は湯飲み碗である。211は茶壺蓋である。216、217は蓋である。218は土瓶である。219は土鍋である。220はすり鉢である。

包含層第2層（図24）

221～225、227は磁器である。

221は碗である。222は染付端反湯飲み碗である。223は丸形碗である。225は染付筒形鉢である。227は染付端反皿である。

226、228、229は陶器である。226は土瓶蓋である。227は土瓶である。229は瀬戸水甕である。

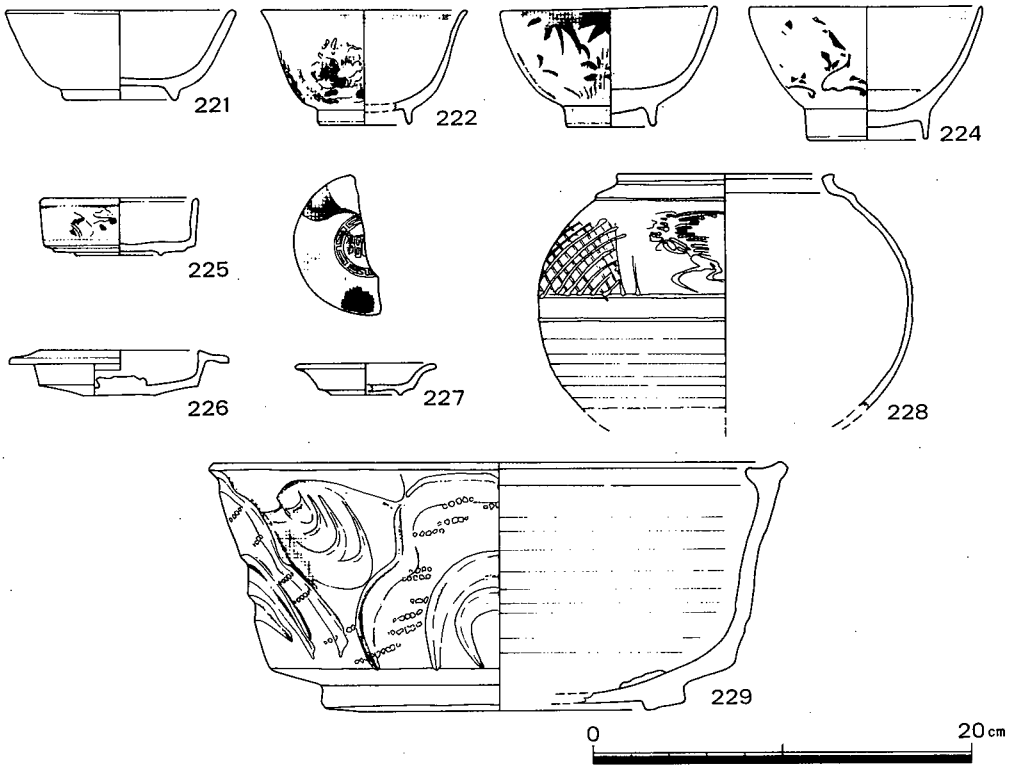


図24　包含層第２層 出土土器

カクラン・機械掘削（図24、図25、図26、図27、図版14、図版15、図版16）

230～237は第２区出土遺物である。

230～233、235～237は磁器である。230は白磁ロウソク立てである。231は染付筒形湯飲み碗である。232は筒形で「防衛食」の文字が読める第２次世界大戦中の瀬戸の製品である。233は染付蓋である。235は小瓶である。236は瀬戸お神酒徳利である。237は香炉である。234は陶器土瓶蓋である。

239、241～243、245、247、250、251は磁器である。

239は筒形湯飲み碗である。底部にヒレ状のものが３方向に付く。241は碗である。242、245、247、250、251、は皿である。243は白磁染付輪花皿である。内面に型紙摺絵を施す。

251は美濃産の国民食器で内面口縁部下にオリーブ灰色の２条の線を引き、見込み部に「貝塚病院」と書く。

238、240、244、246、248、252、253は陶器である。

238、240は仏花瓶である。244、252は陶器水入れである。246は小杯である。外面に呉須で「大阪天神」の文字を書く。248は土鍋蓋、253は土瓶である。

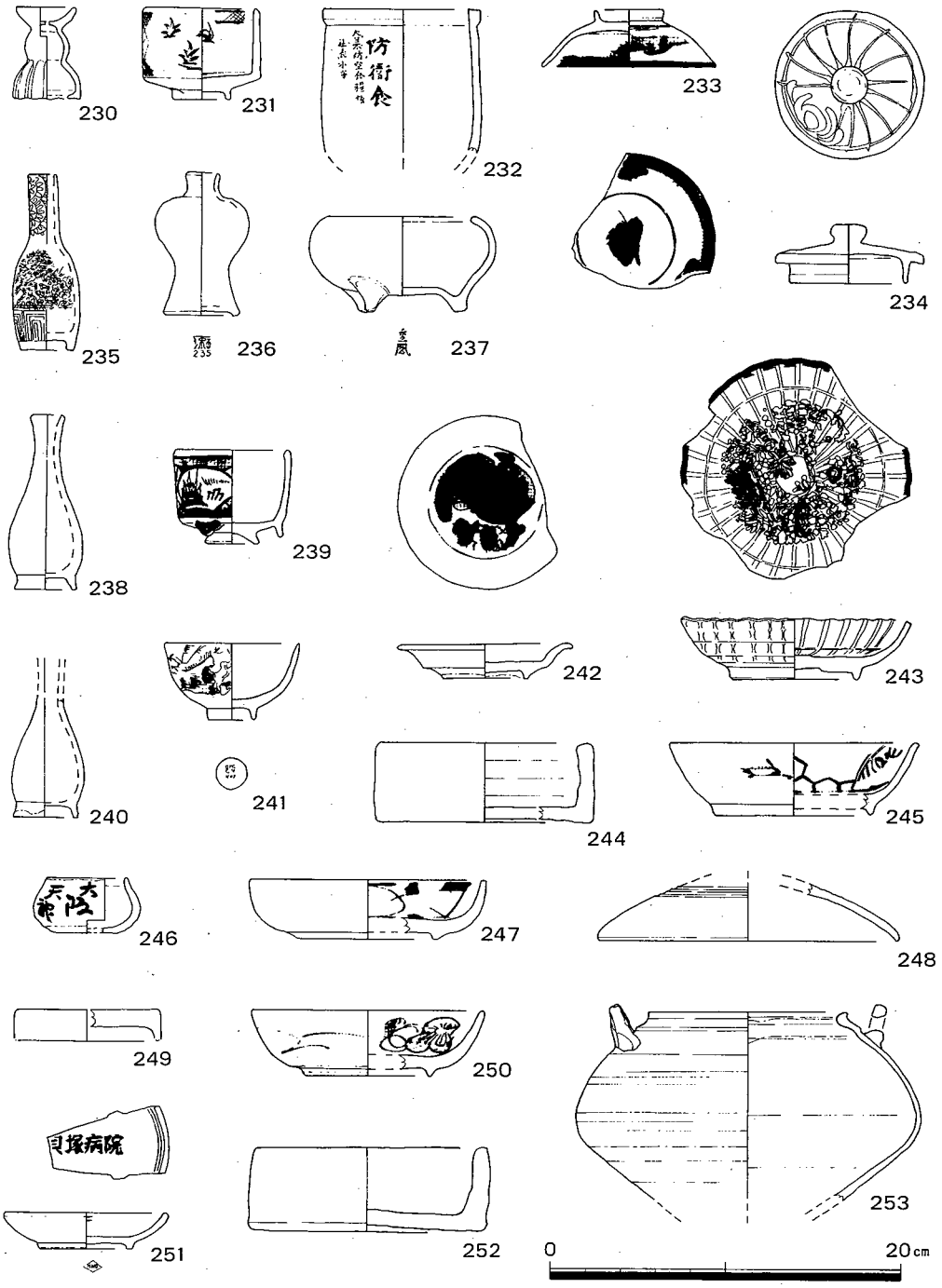


図25　第２区 カクラン・機械掘削(230～237)、第３区 カクラン・機械掘削(238～253)出土遺物

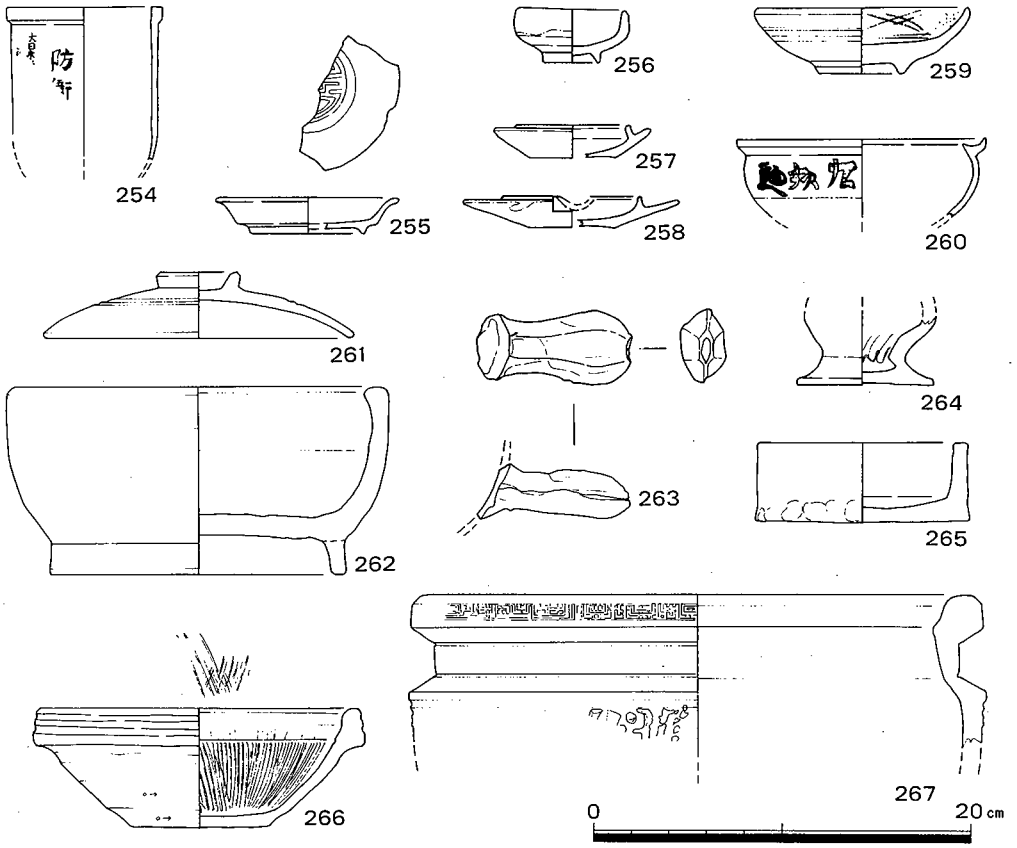


図26　カクラン掘削 出土土器

249は土師質焼き塩壺蓋である。

254、255、259は磁器である。254は瀬戸の製品で「防衛□」の字が読める。255は白磁端反皿である。見込み部に印刻が見られる。259は染付皿である内面に松葉文を描く。

257、258、260、261、263、265、266はは陶器である。

257、258は灯明皿である。260は行平である。外面に「九□□」の字が読める。261は土鍋蓋である。263は行平把手である。265は水入れである。266は堺すり鉢である。262は土師質火鉢である。262は器種不明底部である。267は瓦質火鉢である。

270～273は陶器蓋である。270は「有田焼」の銘を有する。271は外面口縁部上にオリーブ灰色で2条、社章を書く。272は「光山」の銘を有する。273は赤絵である。

275は磁器染付丸形碗である。外面及び内面見込み部にコンニャク印判菊葉文を施す。276は磁器染付皿である。

268は土師質土製品である。269は土師質土錘である。269は土師質土錘である。274は器

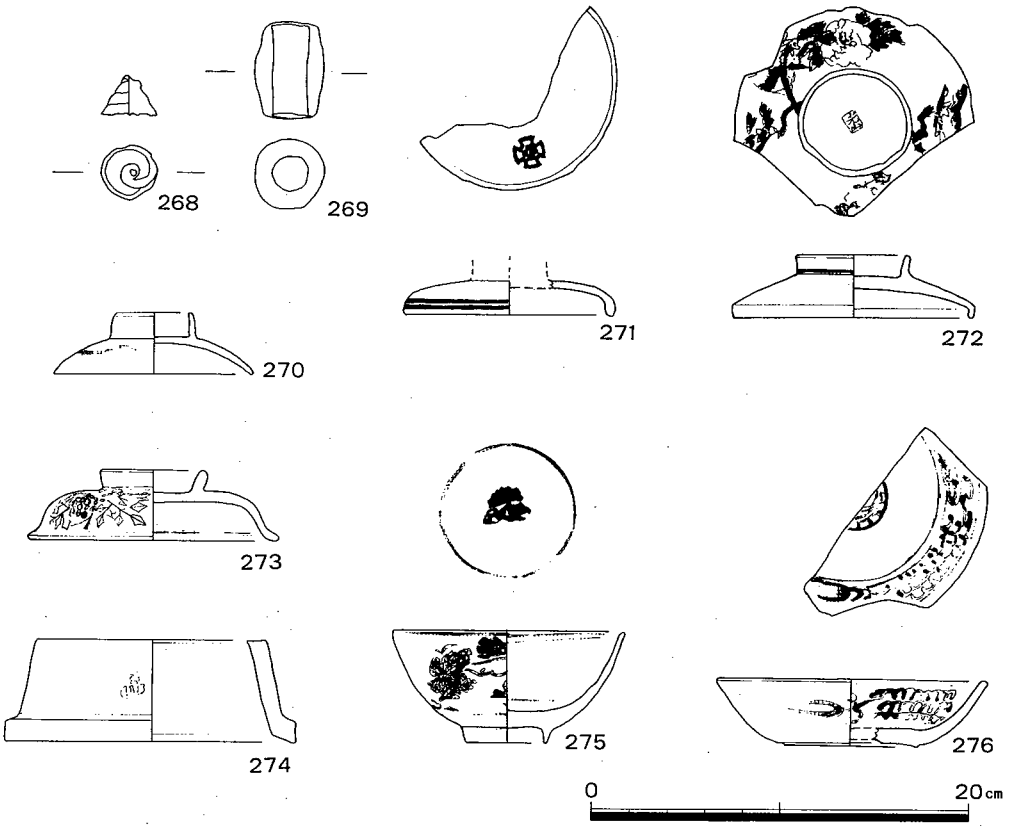


図27　カクラン掘削 出土遺物

種不明である。胴部に印刻らしきものが見られる。277は土師質のキツネである。俵の上に乗っており型取り成形で高さ４㎝を測る。

硯（図版16）

278は長さ13.7㎝、幅6.2㎝、厚さ2.3㎝を測る。カクラン掘削時に出土した硯でやや粗い石質である。

279は長さ18.5㎝、幅6.8㎝、厚さ2.5㎝を測る。機械掘削時に出土した硯できめ細かく堅い石質である。

280は約半分を欠失している。幅7.2㎝、厚さ２㎝を測る。ＳＸ―410にて出土した硯でやや白っぽく粗い石質である。

第4章　ま　と　め

調査地は遺跡の空白地であると考えられていたが本調査において攪乱部を除いてほぼ全域において遺構を検出することができたことは大きな成果であると言える。遺構のほとんどは粘土採掘による土坑および廃棄土坑、耕作に伴う鋤溝で占められる。また、攪乱を受けて破壊されているものの古墳時代まで溯る須恵器が少量であるが出土しており包含層や遺構の存在が考えられることがわかった。

出土遺物の大半は近世の陶磁器でありほか明治～昭和初期まで幅広く出土している。遺物の多くは粘土採掘土坑および廃棄土坑からの出土である。粘土採掘は第3区において広範囲に大規模に行われている。出土遺物は土坑内から一括で出土しているものも多いが土坑によってかなりの時期幅をもつため粘土採掘の時期は18世紀後半以降と考えたい。

調査地の状況であるが第1区、第2区については耕作地として利用されていたようであるが、北境川川岸付近ということもあり利用されて時期は比較的新しいと考えられる。しかし、第2区については鋤溝の方向が変化しており古い時期の鋤溝は川の方向に規制されていない。東西・南北方向の鋤溝が見られ、中世の地区割や条里制の地区割によるとも考えられ興味深い。

第3区は東部に段差を有しており段上は宅地として、段下は耕作地として利用されていたようである。粘土採掘が行われる以前の地形は北境川に向かって緩やかに傾斜する状況であったと考えられるが最大1m以上の掘削が見られ、また市営住宅建設時の攪乱によって地形は大きく変化している。段下部分については粘土採掘は、何度も行われており1度掘削を行った部分を埋め戻して土を除去してからさらに掘削を行ったことが切り合い関係や断面の状況から推測できる。また、大量に粘土を掘削したために埋め戻し土が不足し全体的に地盤を下げたことがうかがえる。

段上部分は段下部分と同様に掘削を行っているが耕作地ではなく住宅建設を行うために凸凹部分を黄灰色土で広範囲に埋め戻して整地を行っている。建物跡は礎石等が残っておらず確認できないが便所は上部を削平されても残っており、便所の位置や配置から長屋建ての建物があったことがわかる。出土遺物から明治～昭和初期にかけての便所であることを確認できた。便槽は、甕を使用したものはなく木槽、コンクリートを用いたものが見られ変遷を見ることができた。

調査地の状況はほぼ把握できたといえるが大量に掘削されたであろう粘土はいったいどのように使用されたのだろうか。

主に考えられる使用方法は、建築資材としてであり、壁土、土塀、瓦屋根などに使用したことが考えられる。

また、推測でしかないが、第２区ＳＫ―451と第３区ＳＫ―301から匣鉢が出土している。在地の焼き物として堀地区において窯跡が存在しておりそこでこの粘土が使用された可能性が考えられる。他には、泉州地域で盛んに行われている瓦生産にこの粘土が使用された可能性も考えられる。

しかし、本調査について文書などにもこのような史料は見られず発掘調査においては使用方法は断定できない。建築資材として使用されていたとするならば粘土採掘が主に行われた18世紀後半に産業の活発化によって都市の発展が進みその結果として建築資材の需要が高まったとは考えられないだろうか。貝塚寺内町遺跡の周辺で多くの粘土採掘土坑が検出されており、これら掘削された粘土は貝塚寺内町で使用されたとかんがえられ、本調査地で掘削された粘土も寺内町で使用された可能性が高いと言える。そのため貝塚寺内町遺跡の調査にこの時期的変化が反映するかどうか検討する必要がある。

最後に、調査地で検出した遺構のほとんどが粘土採掘土坑であるが、もし、粘土採掘が行われていなければ良好な包含層と遺構が検出される可能性が高い地域であると言える。また、逆になぜこの地区で粘土採掘が行われたかについてもさらに検討する必要があると言える。本遺跡について考察を深めるには調査成果を踏まえつつ本遺跡および周辺地域の調査を進める必要がある。

報告書抄録

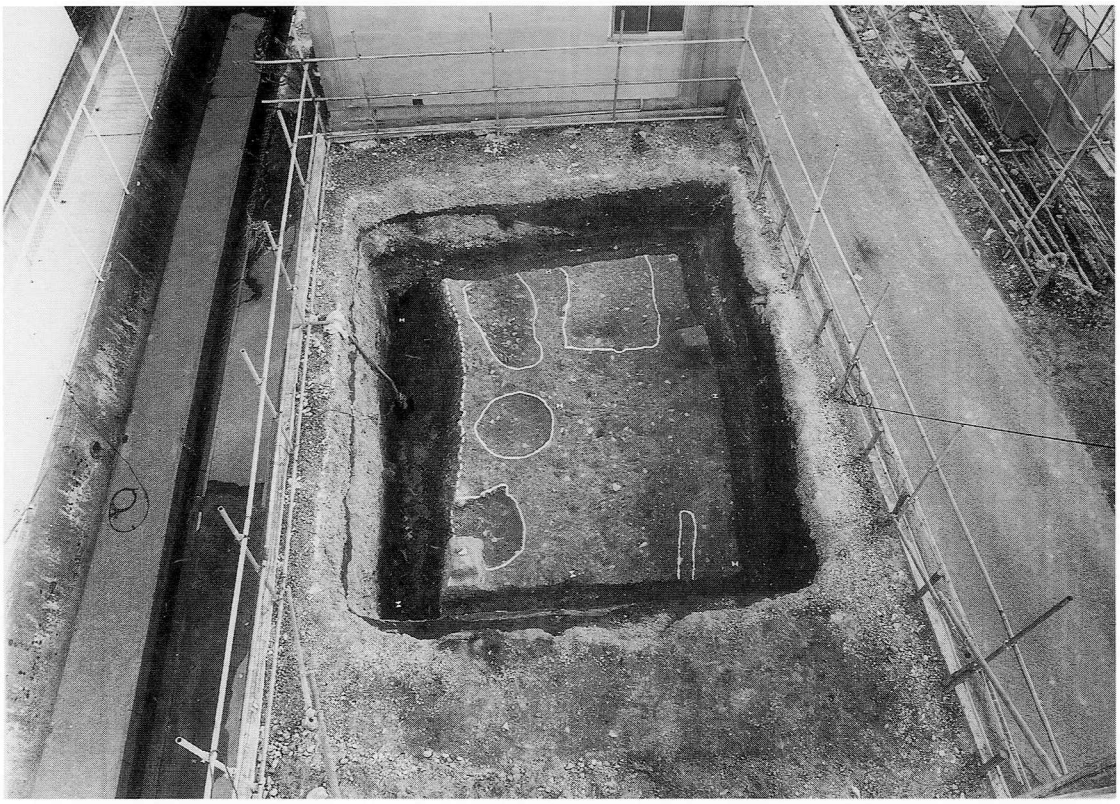
ふりがな	ひがしいせきはつくつちようさがいよう
書名	東遺跡発掘調査概要Ⅰ
副書名	
巻次	
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第　３７　集
編著者名	前川　浩一、三浦　基
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597 大阪府貝塚市畠中１丁目17番１号　TEL 0724(23)2151
発行年月日	西暦　１９９６年　３月　29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
ひがしいせき 東遺跡	おおさかふ 大阪府 かいづかし 貝塚市 ひがし 東	27208	97	34度 10分	135度 22分	19941011 19941226	1,175	共同住宅 建設

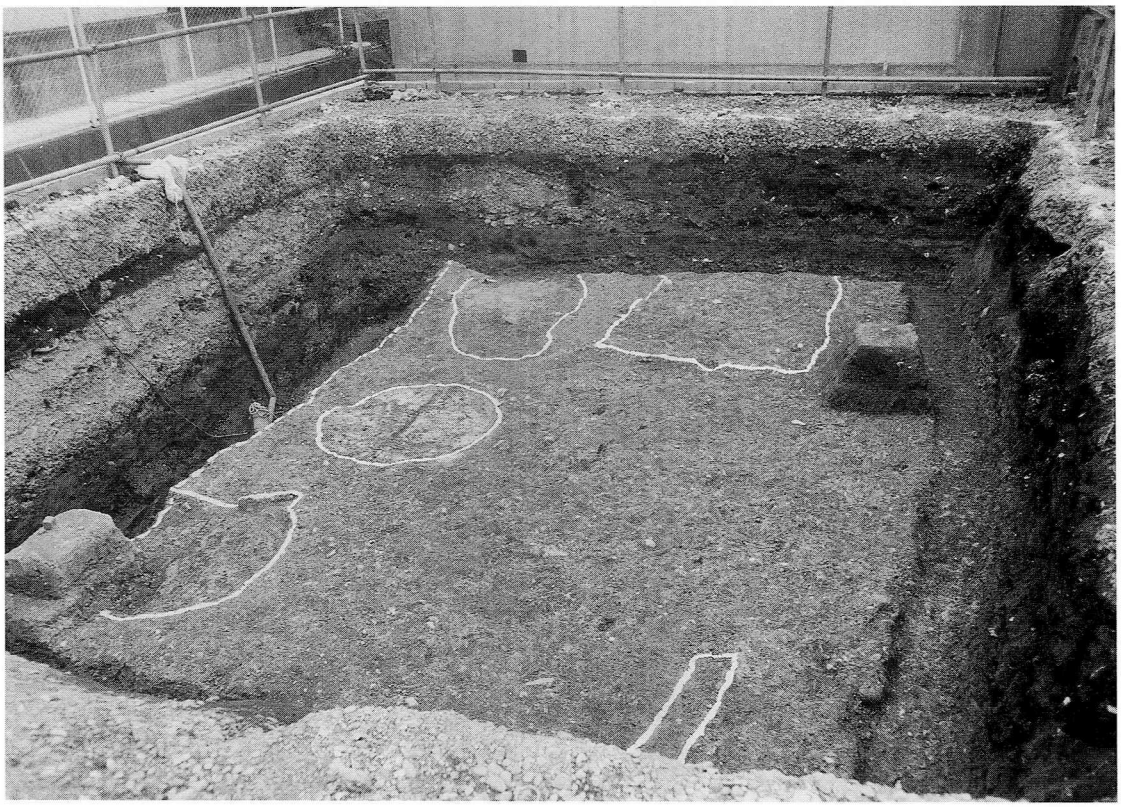
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ひがしいせき 東遺跡	生産遺跡	近世	粘土採掘坑	陶磁器	

図　　版

図版1　検出遺構　第1区

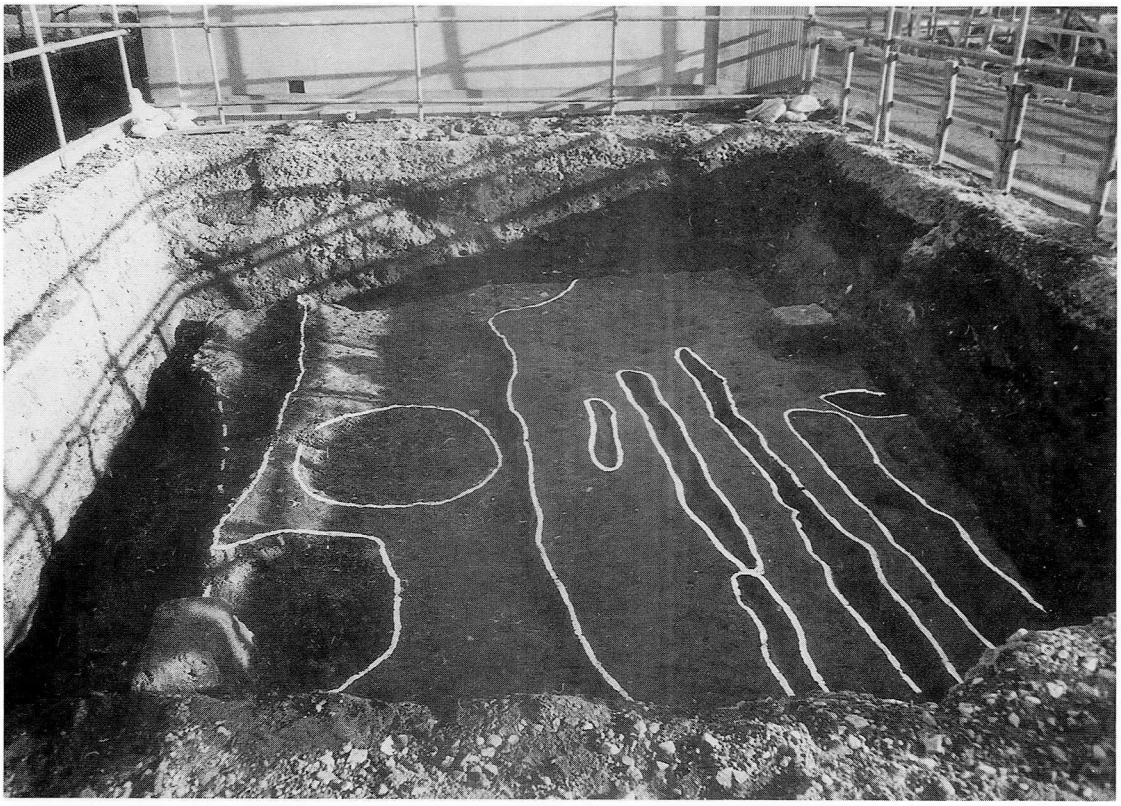


1．第1区 第2遺構面全景　　北西より

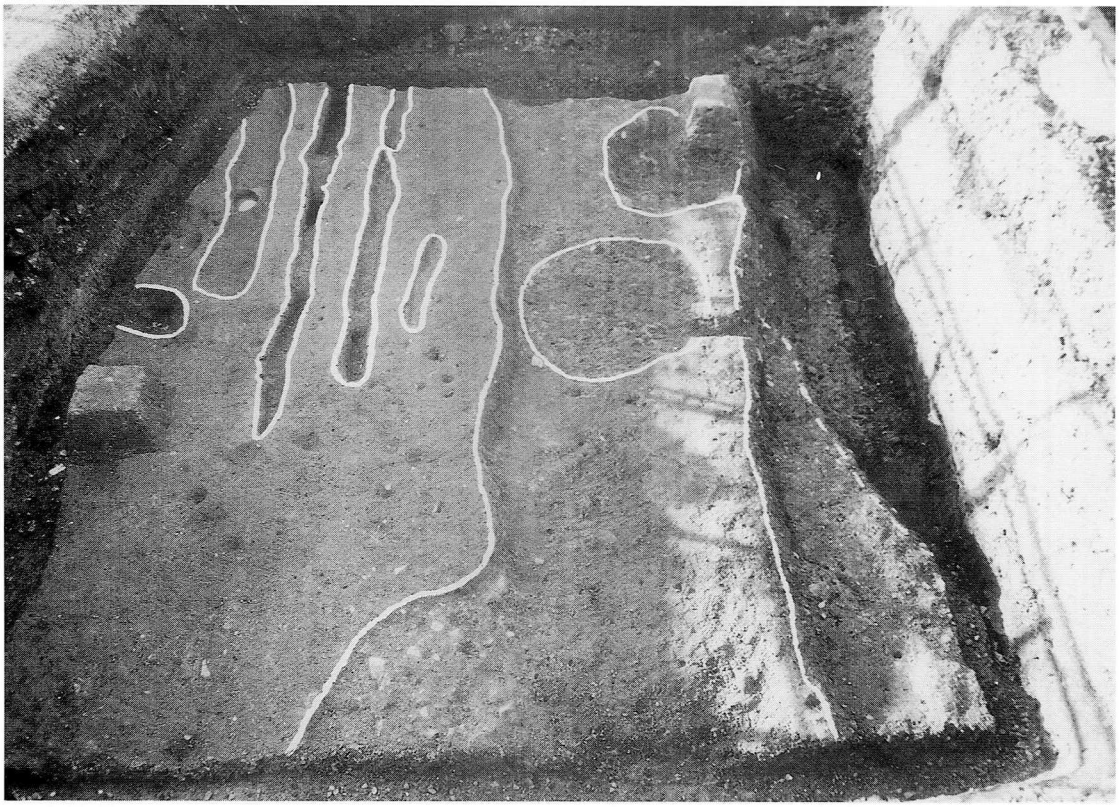


2．同　上　　西より

図版２　検出遺構　第１区



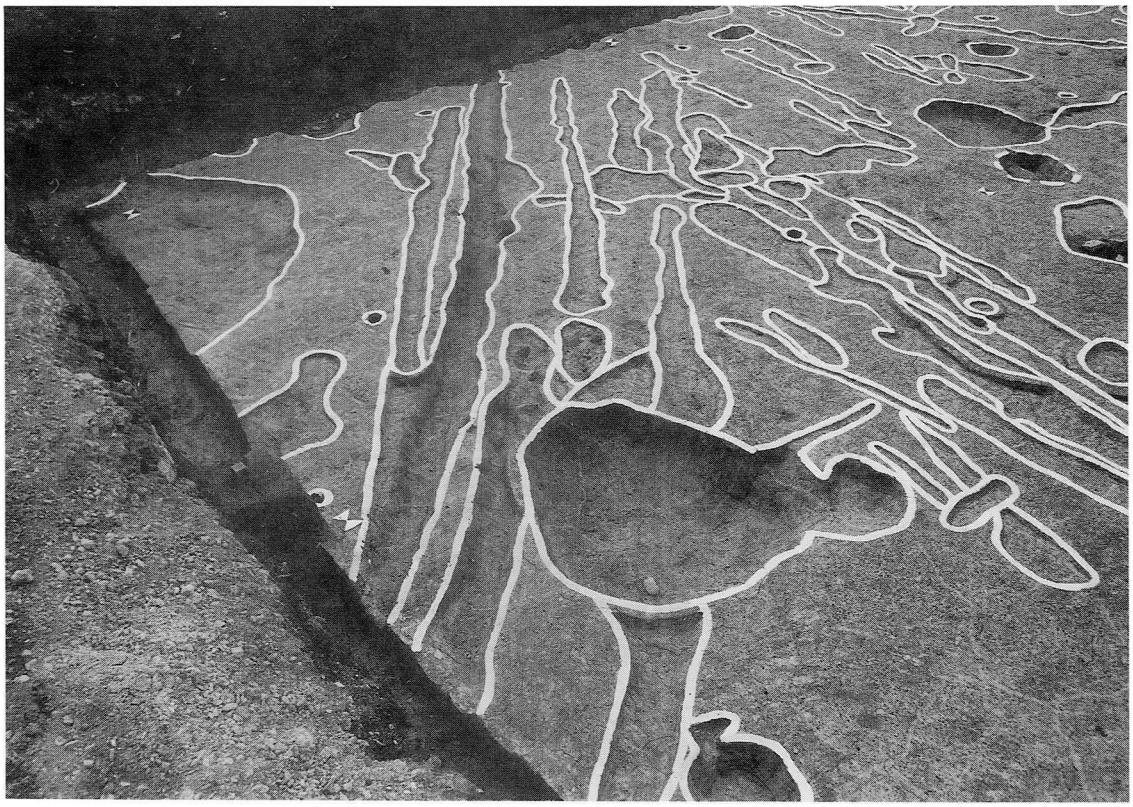
１．第１区 第１遺構面全景　　北西より



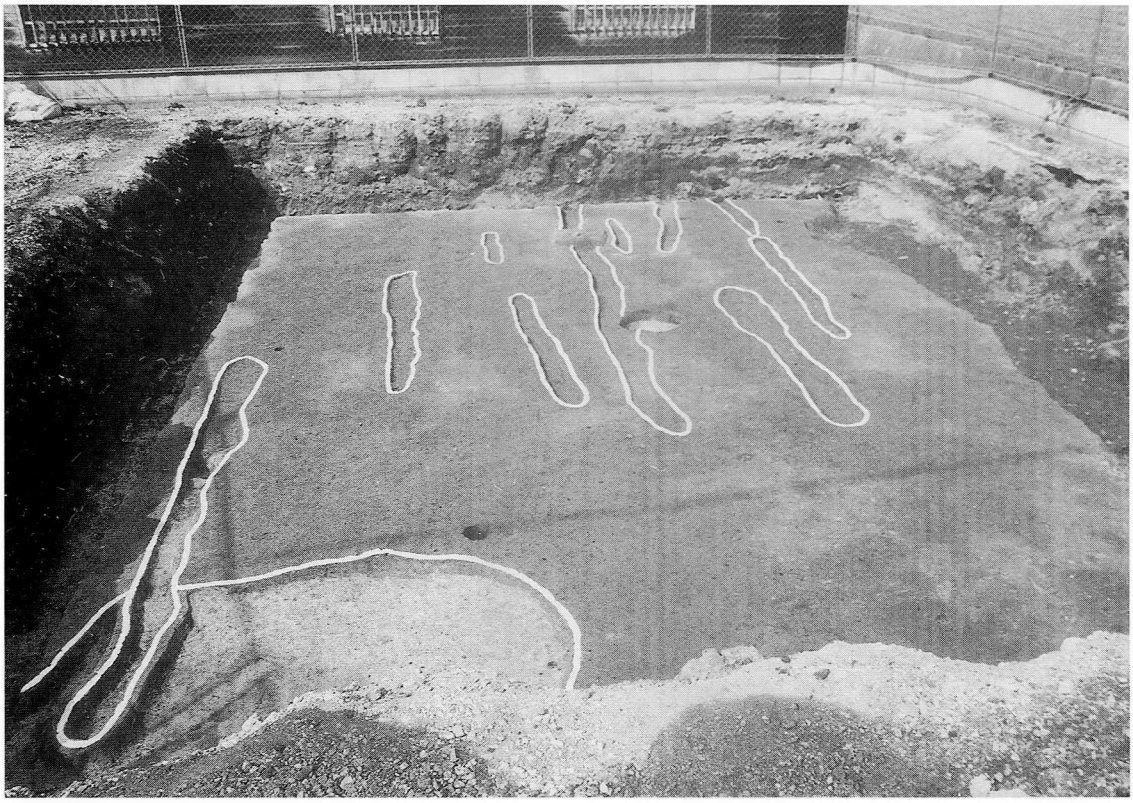
２．同　上　　南東より

図版3　検出遺構　第2区

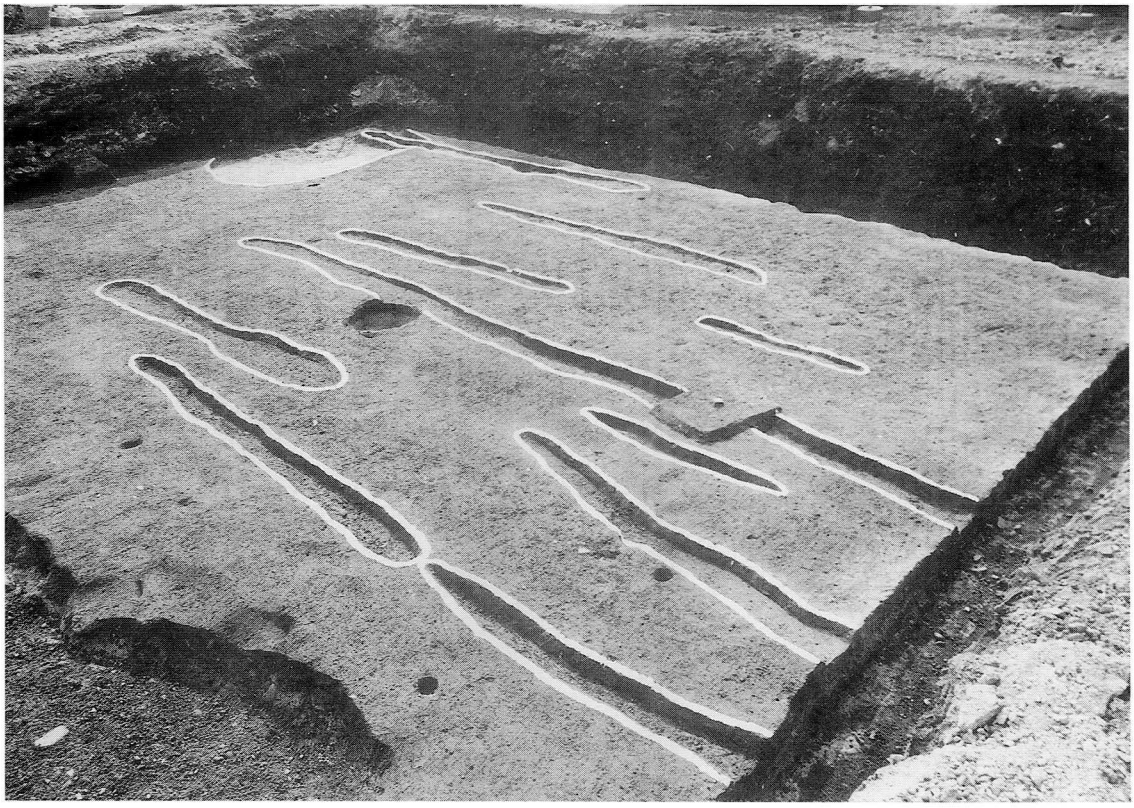
1．第2区 第2遺構面全景　　南東より



2．第2区 第2遺構面 南部　　東より

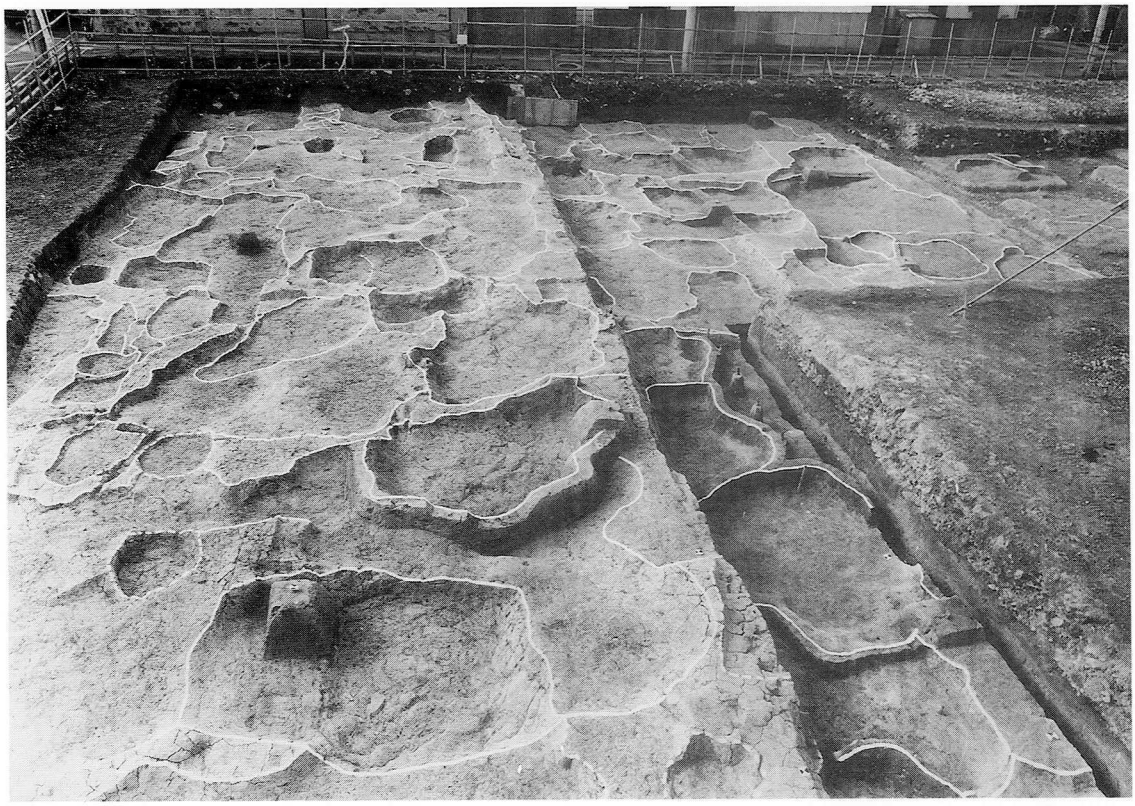


1．第2区 第1遺構面 全景　　南東より

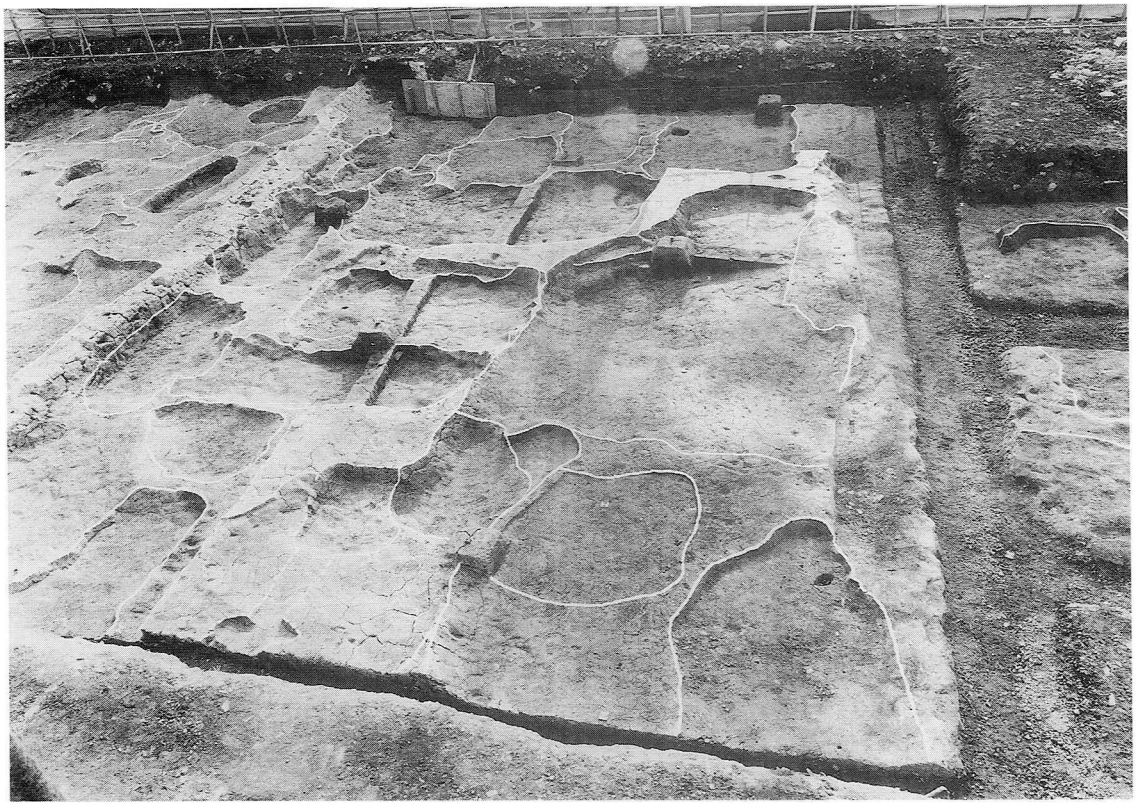


2．同　上　　北より

図版5　検出遺構　第3区



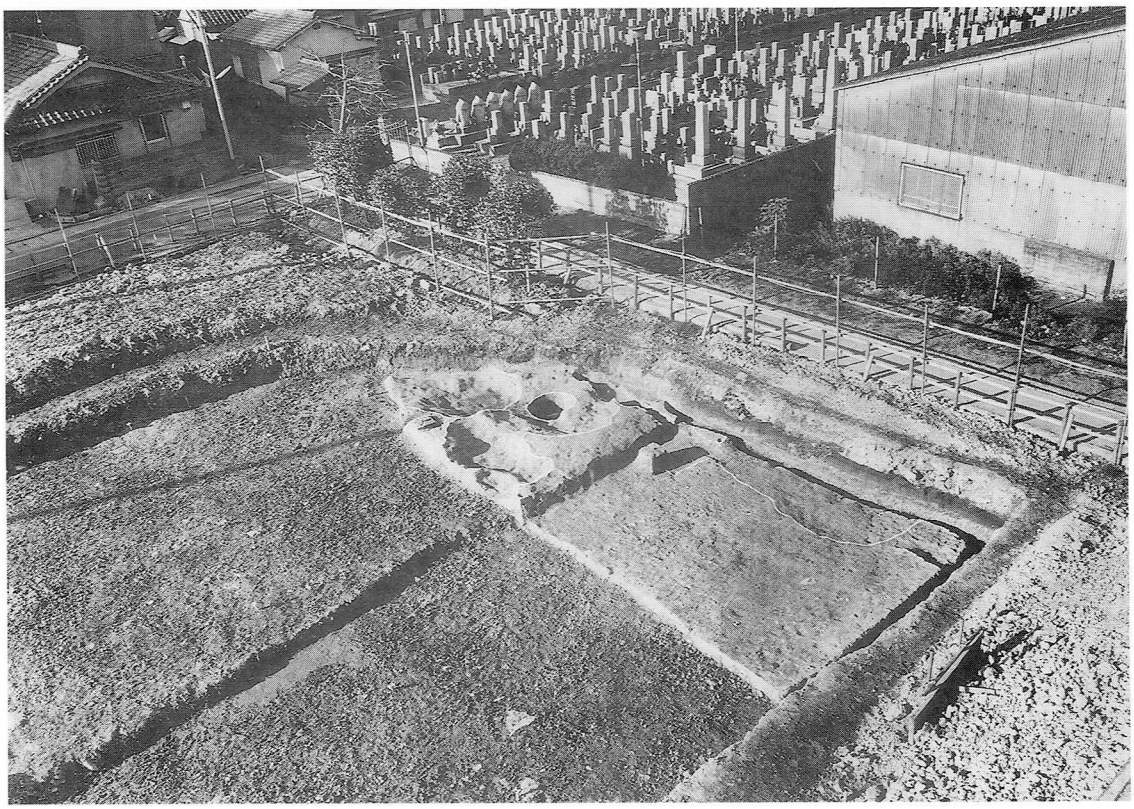
1．第3区 第2遺構面 南東部　　北東より



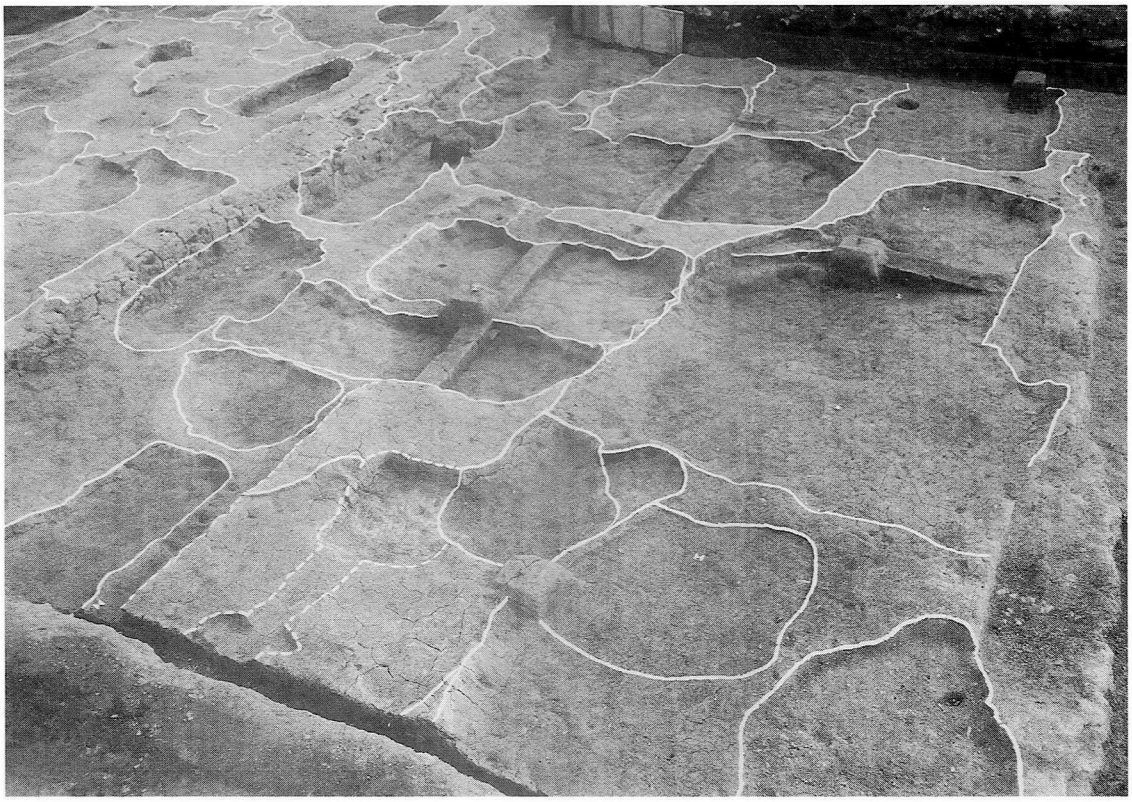
2．第3区 第2遺構面 東部　　北東より

図版6　検出遺構　第3区

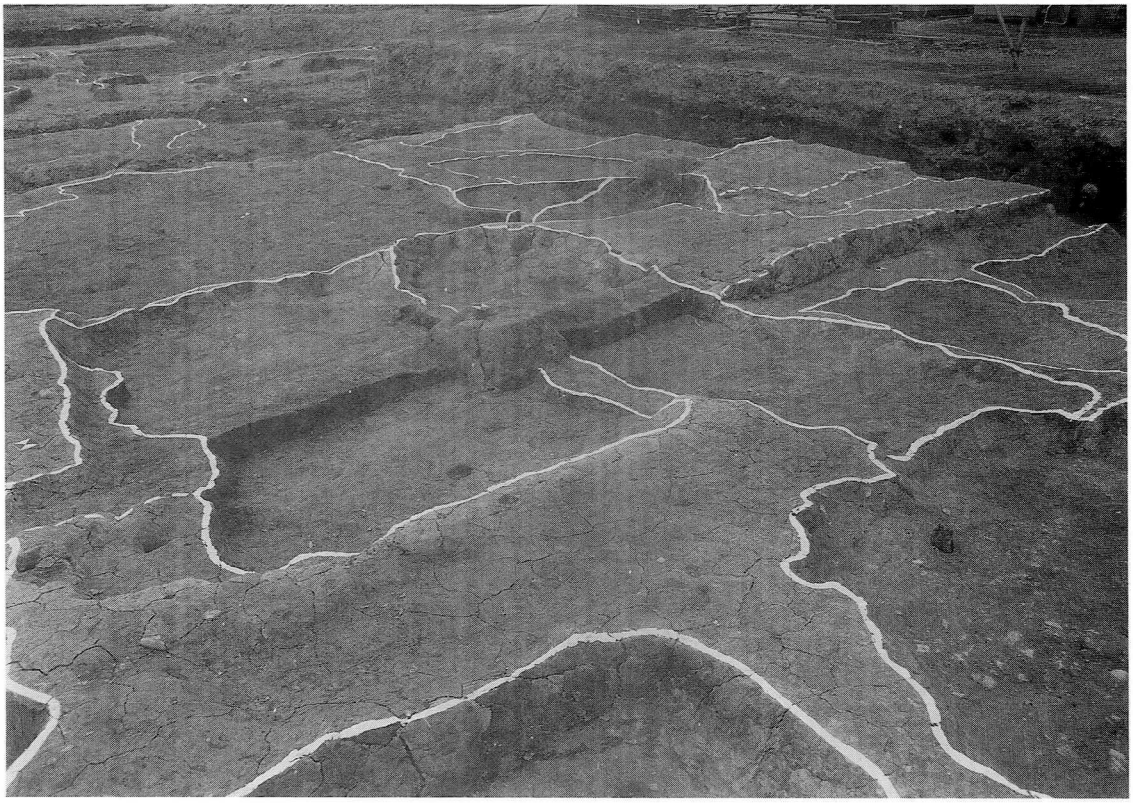
1．第3区 第2遺構面 中央部　　北より



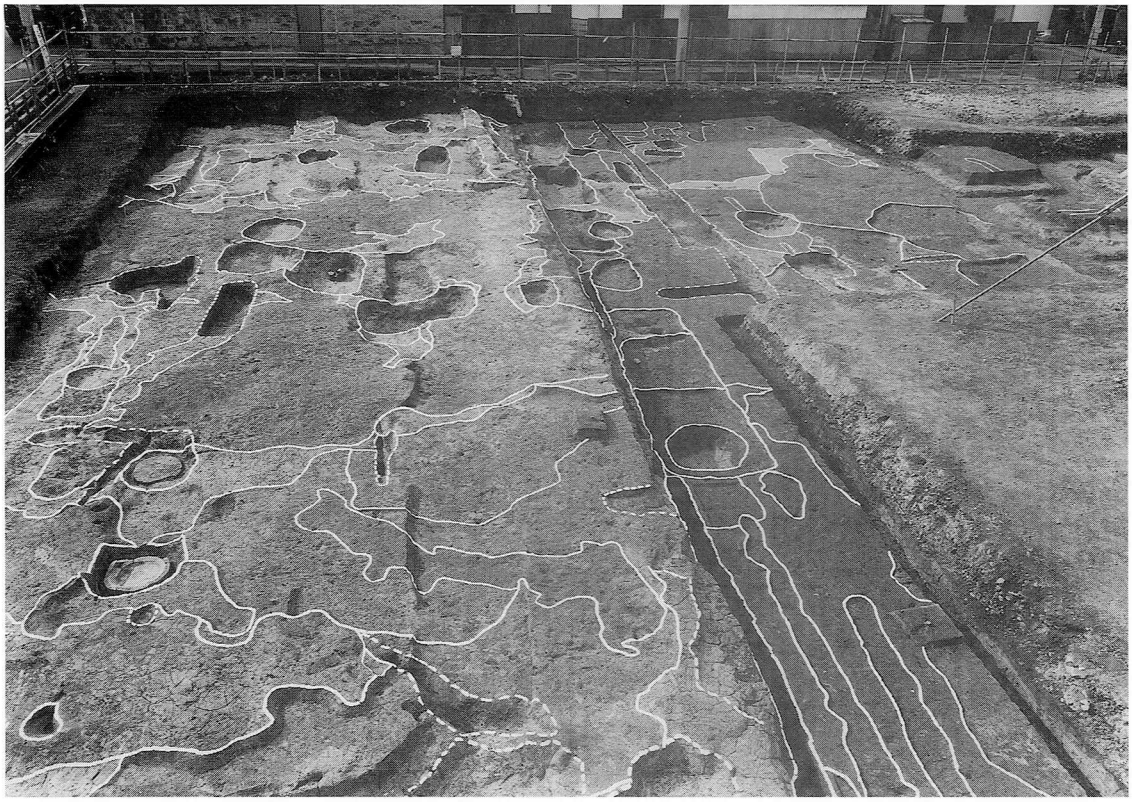
2．第3区 第2遺構面 西北部　　東より



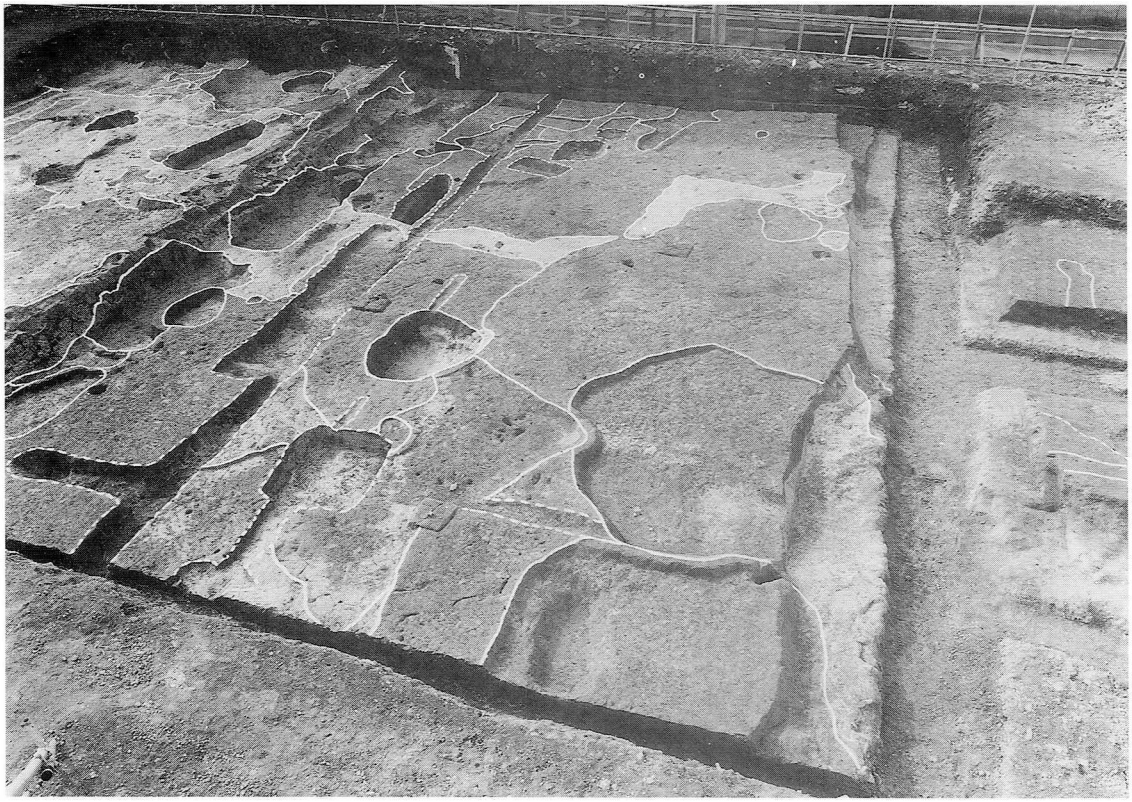
1．第3区 第2遺構面 SX－408、SX－409　　北より



2．同　上　　南より



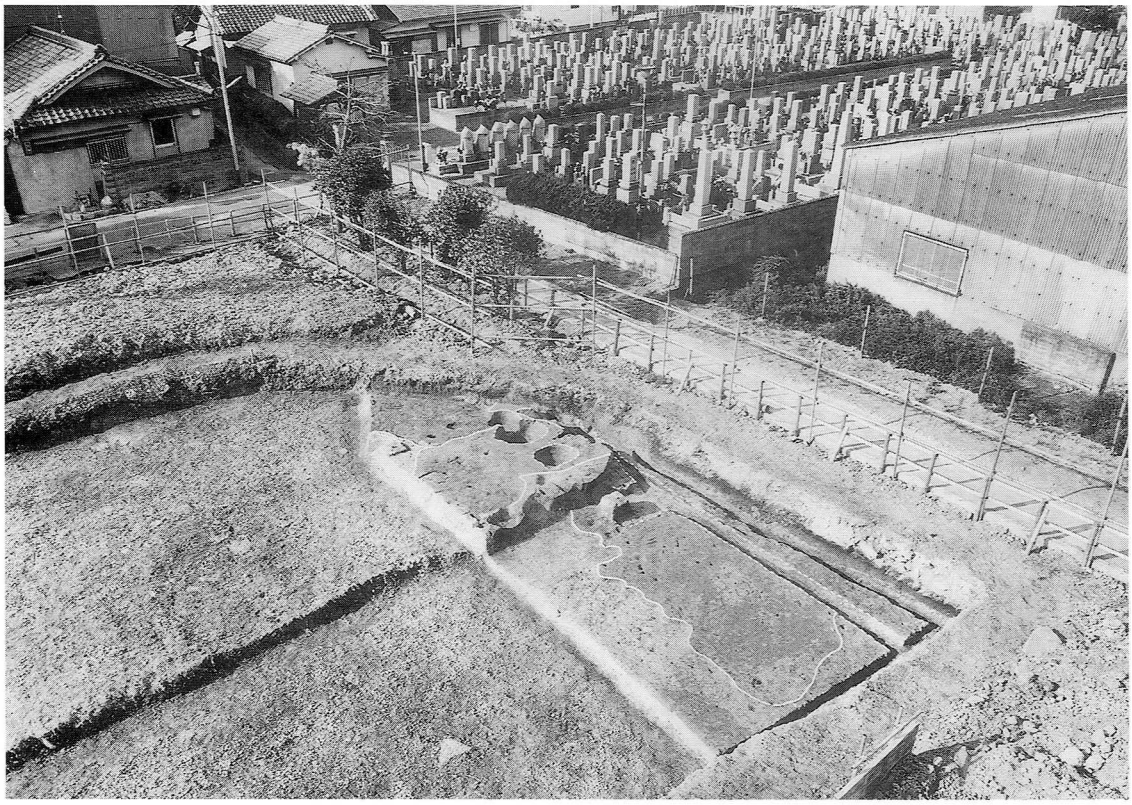
1．第3区 第1遺構面 南東部　　北東より



2．第3区 第1遺構面 東部　　北東より

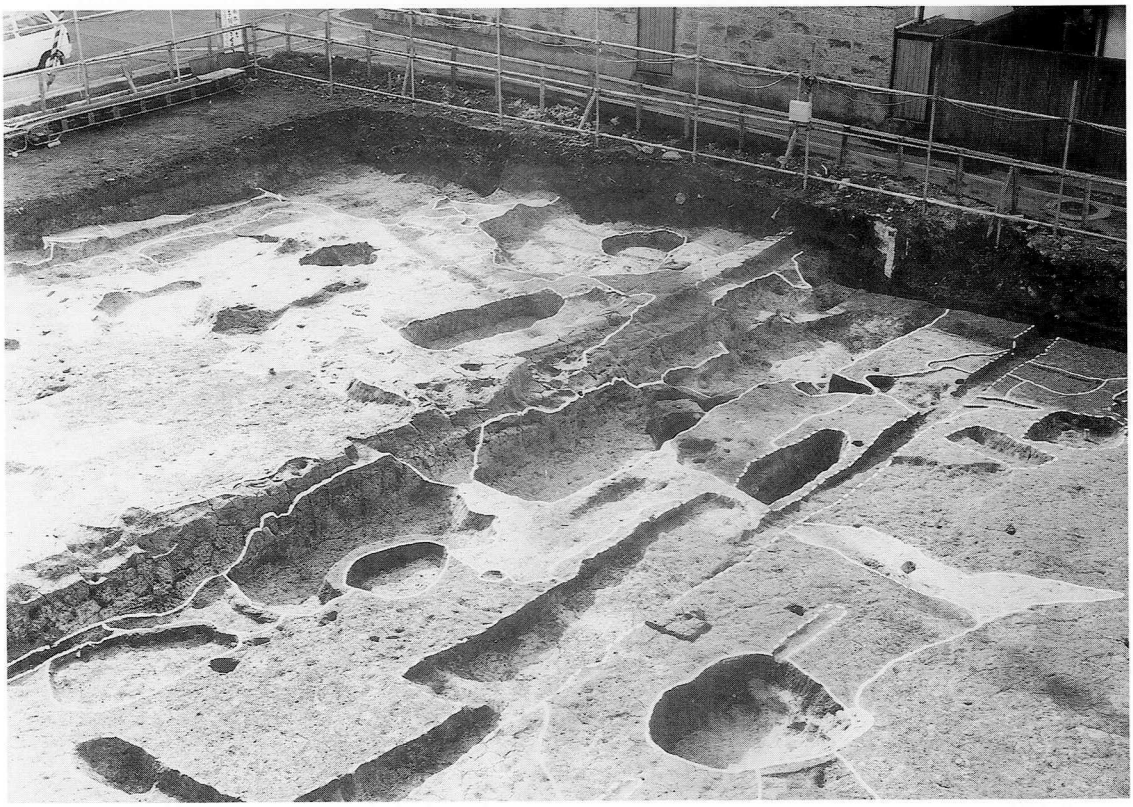
図版９　検出遺構　第３区

１．第３区 第１遺構面 中央部　　北より

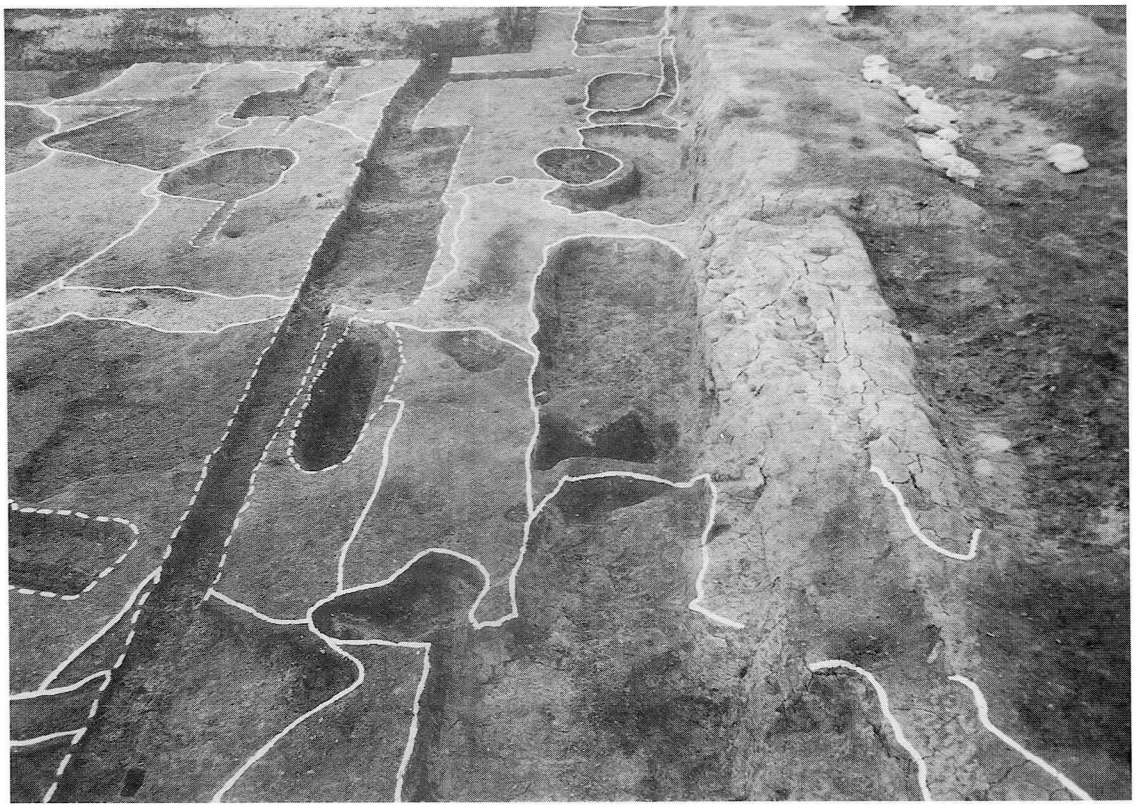


２．第３区 第１遺構面 西北部　　東より

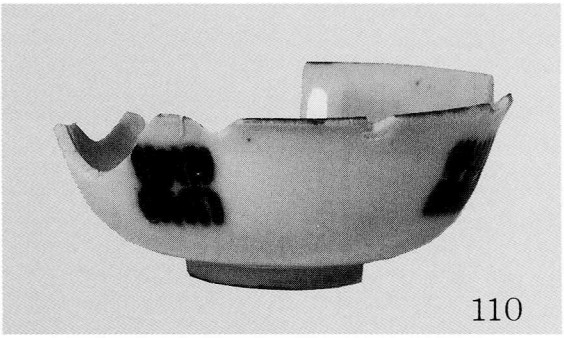
図版10　検出遺構　第3区

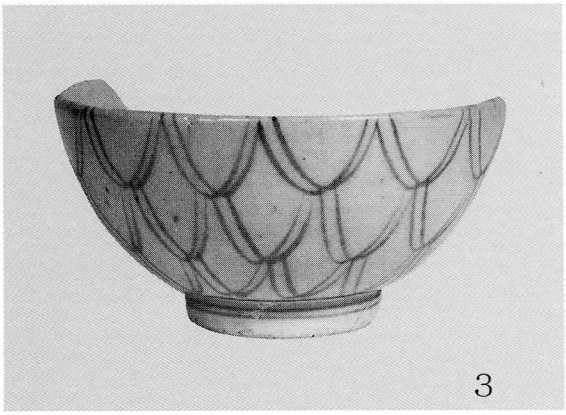


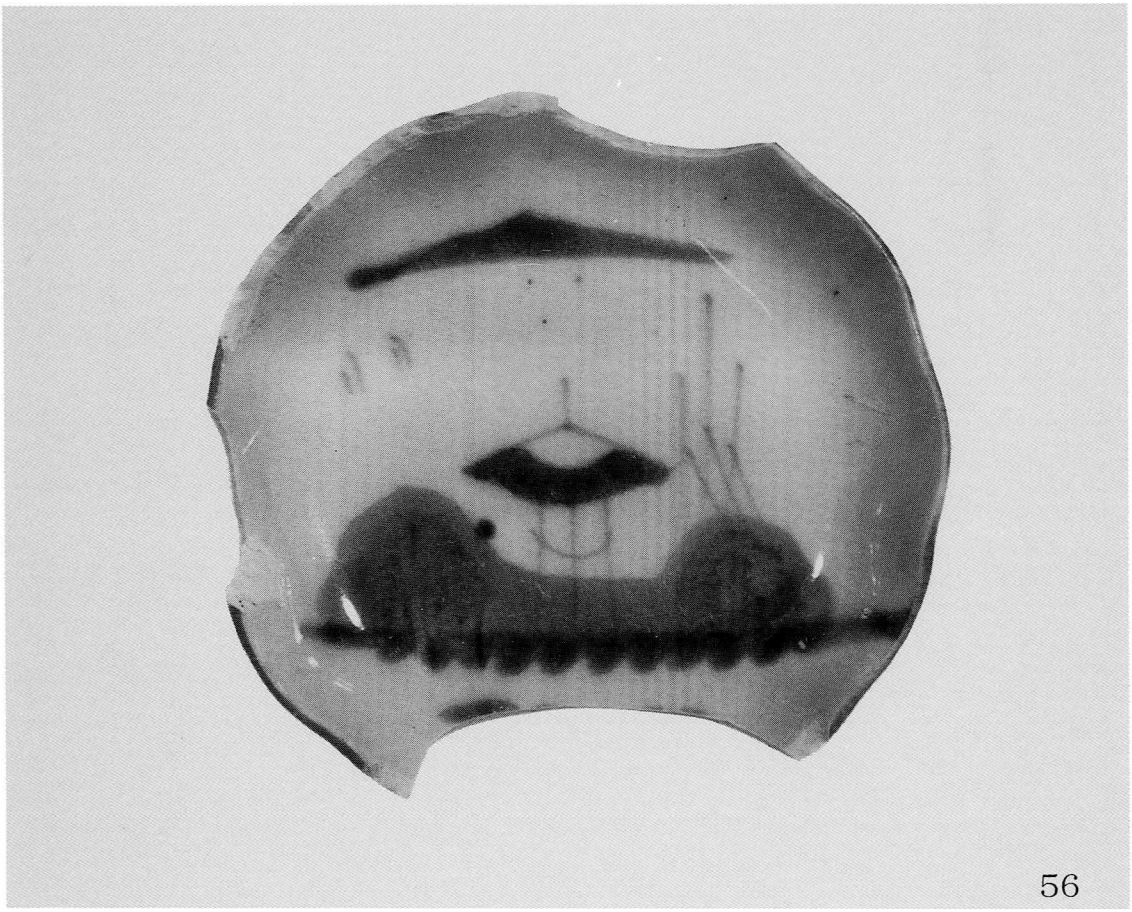
1．第3区 第1遺構面 SK－204　　北より



2．同　上　　南西より





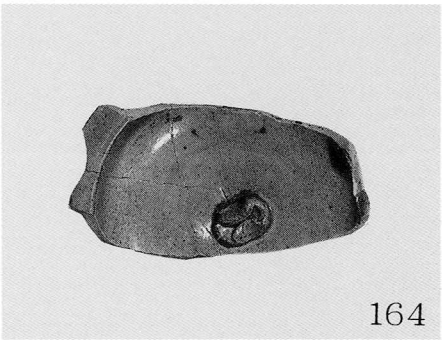


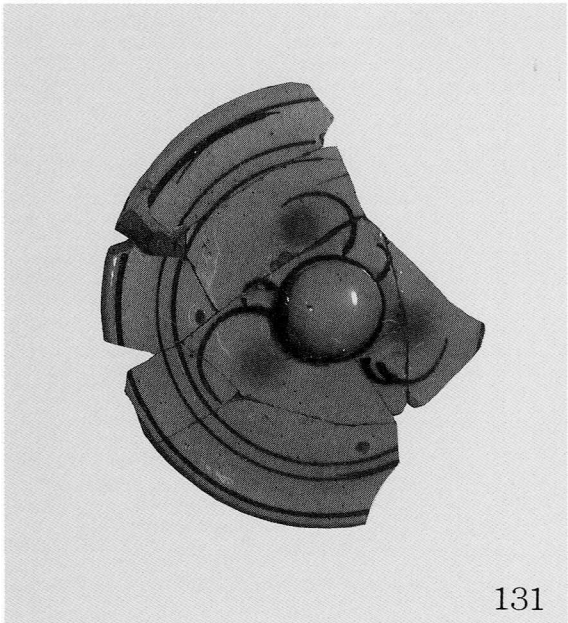
SX－401(3)、SX－412(56)、SX－209(110、113) 出土土器

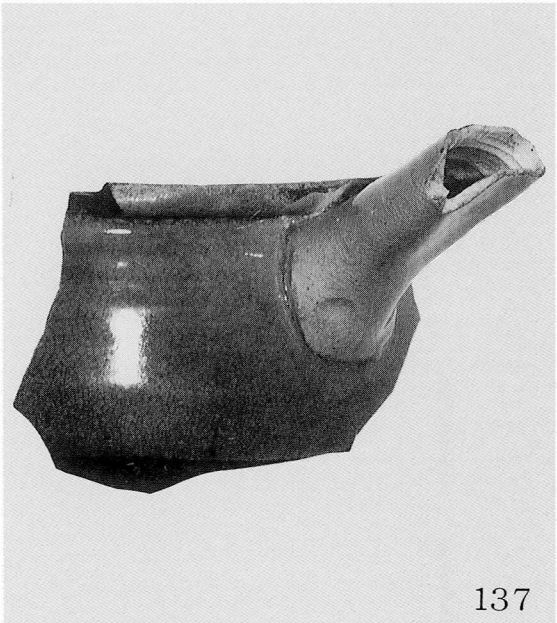
図版12　出土遺物

77

128

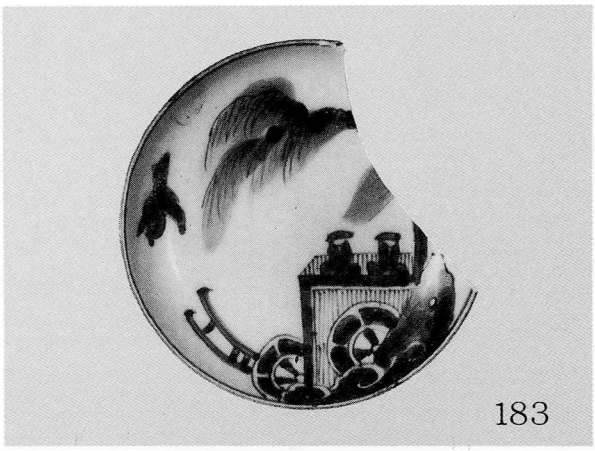

164

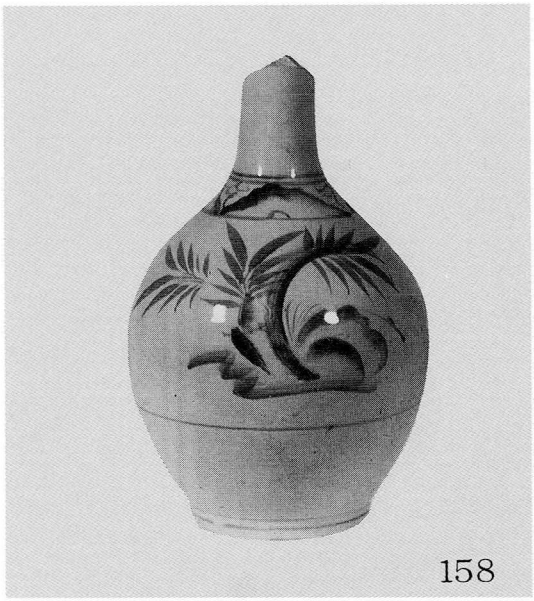

131

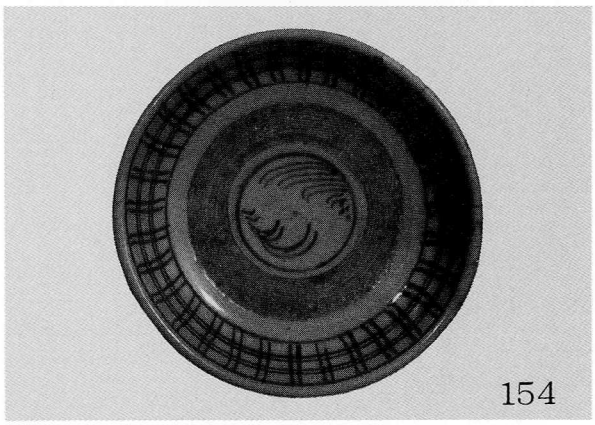

137

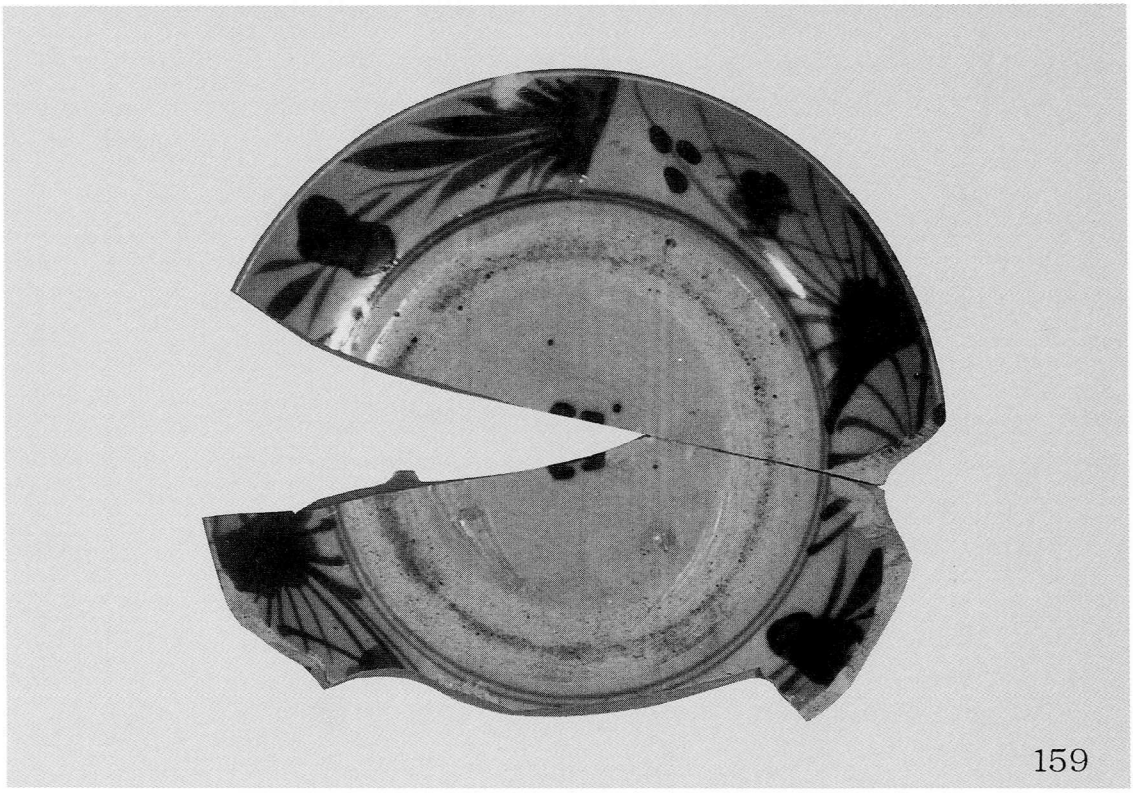
123

SX－413(77)、SK－204(123、137)、SD－201(128)、SX－208(131)、SK－102(164) 出土遺物

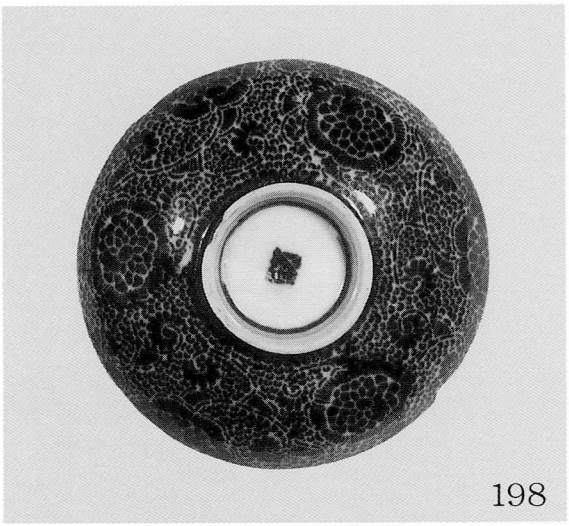


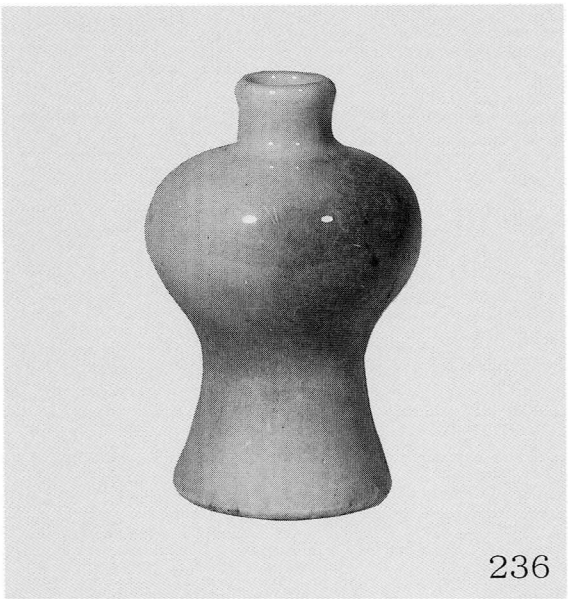


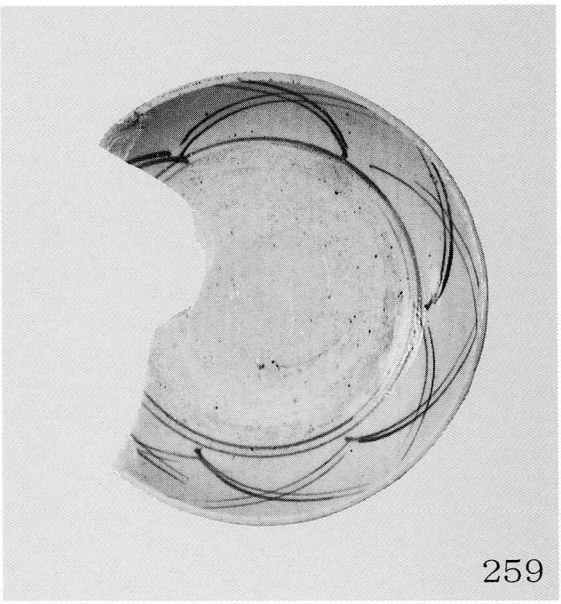




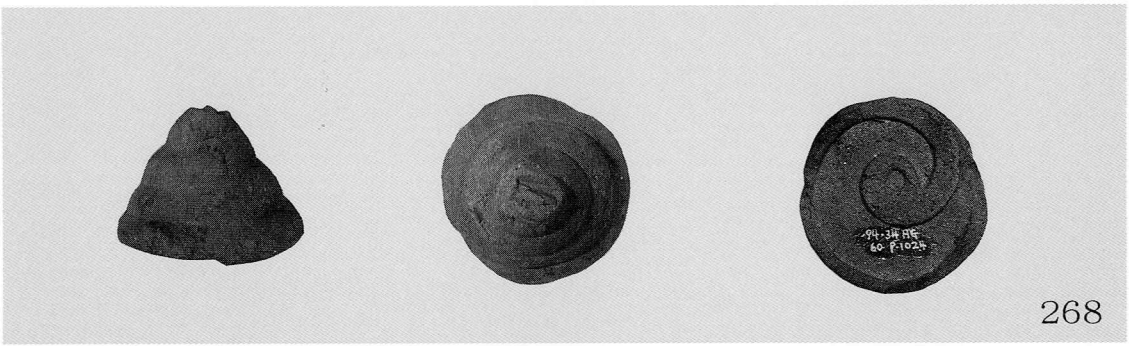
SK－101(159)、SK－102(148)、SK－103(154、158)、SK－106(183) 出土土器

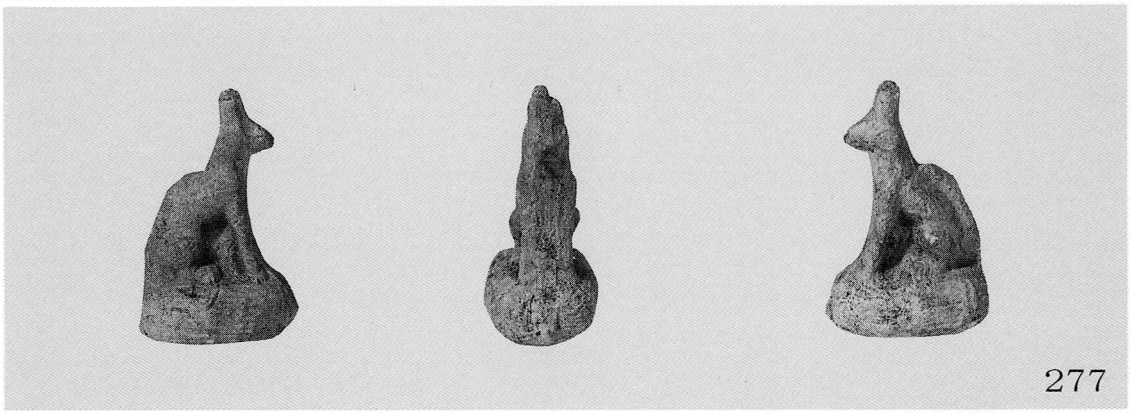


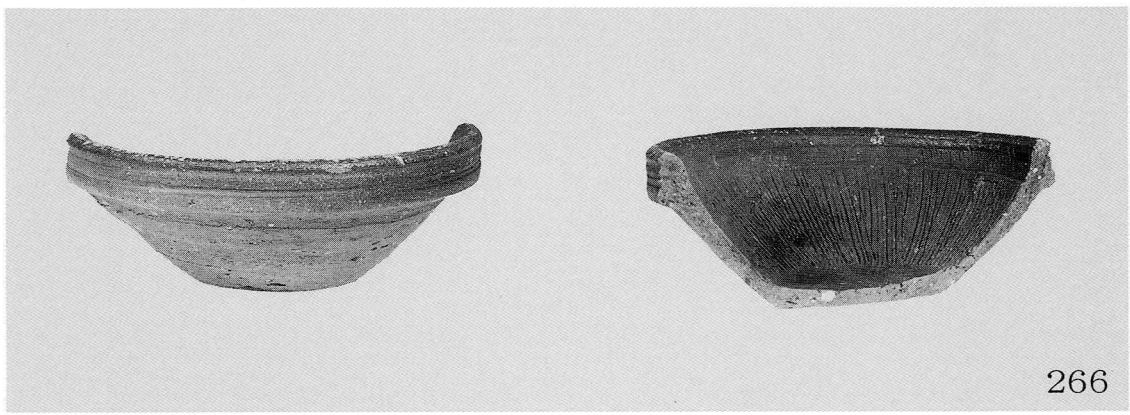




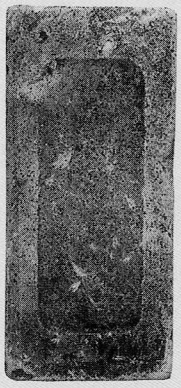
カクラン２(198)、第２区カクラン・機械掘削(232、234、236)、
第３区カクラン・機械掘削(239、259) 出土土器



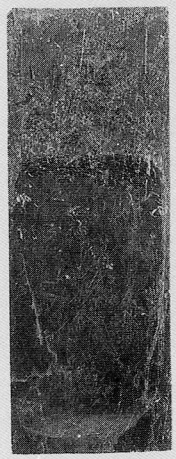




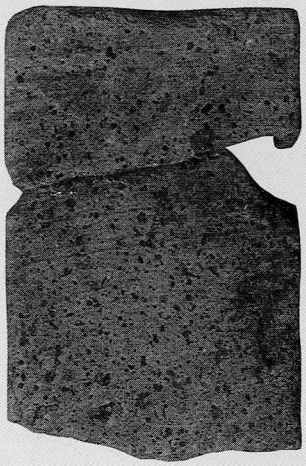
第3区 カクラン・機械掘削 出土遺物



278



279



280

硯　SX－410(280)、第３区　カクラン・機械掘削(278、279)

貝塚市埋蔵文化財調査報告　第37集

東遺跡発掘調査概要 I

発行日　1996年3月29日
編集・発行　貝塚市教育委員会
　　貝塚市畠中1丁目17番1号
印　　刷　摂河泉文庫(貝塚市北町20—18)